

# あおは わかれ



MARCH 2012  
宮城教育大学広報誌

vol.25

NATIONAL UNIVERSITY CORPORATION,  
MIYAGI UNIVERSITY OF EDUCATION

## シリーズ「歴史のなかの教科書」⑬

宮城教育大学附属図書館が所蔵する小学校教科書を毎号紹介していきます。



### 大阪書籍『小学国語』〔昭和45(1970)年〕

今の大学生の父母が、小学生だったころ使ったかもしれない教科書。  
ノーベル文学賞作家の川端康成が編集に加わっている。著名な作家が監修・著作にあたるのが、当時の国語教科書の潮流だった。  
バランスの良い内容構成で、言語表現の多様な様式に親しめるようになっている。

#### 特徴

1. 文学作品の充実。『最後の授業』『大きな白かば』など、名授業を生んだ物語を掲載。
2. 日本語そのものを子どもに意識化させる系統的な単元。「口のたいそう」「日本語の性質」などが1年生から系統的に配列されている。
3. 各学年に必ず「げき」の単元があり、演劇脚本が入っている。
4. 伝記の充実。なんと、ドイツの哲学者カントの伝記が、4年生に登場する。「高い空には、星が光っている。そして、この地上には、星にくらべられるほどたいとうい、人間の真心が、光っている」という美しい一節が引用されている。

写真は、1年上の最初のページ。きっと、入学したばかりの1年生に、この4枚の絵から気づくことを語らせ、ストーリーを創作的に読み取らせたのでしょうか。

みなさんなら、どんなストーリーを読み取りますか？

解説・学校教育講座 田端 健人

## Contents

### 第1特集 FEATURE ARTICLES 1

- 00 教育に街に。  
灯し続けよう希望の光  
～宮教大の復興支援活動～

- 06 卒業生の軌跡  
仙台の元気と希望の光を伝える

### 第2特集 FEATURE ARTICLES 2

- 08 小学校英語活動を  
一緒に考えましょう!

- 10 MIYAKYO NOW

- 12 Campus Life

- 19 国際交流NOW

- 20 学生広報スタッフのココが知りたい!

- 22 研究室FILE

- 24 連携NEWS

- 26 附属学校部から

- 28 宮城教育大学の未来を担う、若手職員たちを紹介します!

- 29 Topics

## 第1特集

# 教育に街に。 灯し続けよう希望の光

## ～宮教大の復興支援活動～

世界中を震撼させた東日本大震災発生から1年が経ちます。震災直後から宮教大の学生たちは、自主的に復旧・復興ボランティア活動に取り組んできました。平成23年6月28日、学内に「教育復興支援センター」を設置してからは、復興支援活動をより組織的に支えることが可能になっています。宮教大では、今後も長期的に復興支援に取り組んで参りますが、今号特集では、学生たちの体験記などを中心に、本学の復興支援活動の一端をご紹介します。



### 東六郷幼児学園でのボランティアを経験して

初等教育教員養成課程  
幼児教育コース 3年 柴田 真実

私たち幼児教育コースでは、震災から4ヶ月ほど経った7月半ばから東六郷幼児学園でボランティアとして活動しました。東六郷幼児学園は、震災以降、六郷中学校の教室を間借りして保育を行っています。間借りしている状況というのは、想像よりもはるかに混沌としていて、震災が子どもたちの学校生活に与えた影響の大きさを感じました。また、保育室となっている教室は、あまり広くなく、保育をするのに十分な大きさとは言えません。そのような保育をするのに決して豊かではない環境の中でも、特に印象的だったのは、子どもたちが非常に落ち着いているという点です。先生の言うことをよく聞いていて、先生が少し保育室を離れなければいけないときも、静かに待っているのです。こんなに聞き分けのよい子どもたちがいるのかと驚きました。常に、間借りしているということを子どもたち自身が感じているようにも思いました。子どもたちなりに、先生を助けてあげたいと思っていたのかもしれません。子どもの人数も減り、寂しい気持ちや不安も必ずあるはずなのに、周りを考えて行動し、常に明るく振る舞う幼児の姿に私たちのほうが励まされました。それと同時に、この子どもたちがのびのびと思いきり遊ぶことができたならどんなによいだろうかとやり切れない気持ちにもなりました。

また、ボランティアをしている最中にも、緊急地震速報が入ってきたり、余震が起こったりすることがありました。その時の先生や子どもたちの緊張した表情から、海が近いからこそ感じる緊迫感を感じました。ふと訪れる緊張感が先生たちや子どもたちの心の負担、ストレスになっているのではないかと思います。

私たち学生が、ボランティアとして活動することで、どれだけ幼児学園の先生や子どもたちに貢献できたかは分かりません。しかし、私たちがこの経験から多くのものを得られたことは確かです。震災から1年という節目を迎えましたが、これからも将来を見据えた長期的な支援が必要なのではないかと感じます。





## 郡山中学校でのボランティア活動を振り返って

初等教育教員養成課程  
社会コース 3年 星 知美

6月4日(土)、仙台市立郡山中学校にて避難所である仙台市立六郷中学校への炊き出しボランティアに参加させて頂きました。当日は郡山中学校PTAや家庭部の皆さん、教職員の方々合わせて30名ほどが調理室に集まりました。メニューはあさりの炊き込みご飯と豚汁、コロッケで、出来立てを六郷中学校で生活をする皆さんへ直接届けました。

避難所の方々は私たちが笑顔で迎えてくれましたが、一人でボーっとどこかを見つめ、放心状態に近い様子の方もいて、その姿がまさしく今の被災地の現状を物語っているように感じ、大きなショックを受けました。それと同時に、自分は今普通の生活を送っているのかと申し訳ない気持ちにもなりました。震災から1年が経った今、支援の「質」が変化しています。実際にあの震災を経験した私たちだからこそ、被災地の現状をリアルタイムで把握し、今何が必要なのかを日々考えていくことが重要であると感じています。



## 多くの人との出会い…将来につながる経験

初等教育教員養成課程  
社会コース 3年 佐藤 智基

私は現在、仙台市若林区荒浜地区の方々が居住している2箇所の仮設住宅で、学習支援をさせていただいております。昨年の4月、泥出しのボランティアに参加した際に震災の被害を確認し、自分にもっとできることがしたいと思ったのがきっかけでした。

生活環境が一変してしまった子どもたちに、学習習慣を定着させるという目的で、避難所から学習対策を始めました。それが避難所の閉鎖のため、仮設住宅に移り、今なお同上の目的のため、楽しみながら学習会を行っています。最初は私と友人の2人だけでしたが、NPOの方や、地域の民生委員の方にもバックアップしていただき、今では他大学の学生や、元教師の方、現職の教師の方にも参加していただいています。

学習会には学年の異なる20人程の子どもが集会所に集まるので、日々苦心しながら、子どもが勉強できる空間作りに励んでいます。多くの人との出会い然り、空間作り然り、将来につながる経験であると感じています。



**「自分にできることがしたい」**特別支援教育教員養成課程  
視覚障害教育コース 3年 **三瓶 真実子**

「自分にできることがしたい」。その気持ちから、私はボランティア活動をしました。活動は、避難所運営の手伝いや学習支援、また、視覚障害のある人のガイドヘルプ（移動支援）です。

避難所に泊まって二日後、そこで生活している人が会話の中で「馴れてきたね」と笑って私に言ってくれました。それは、人の生活の中に入って活動することの意味を感じた瞬間でもありました。自分にできることは、そこにいる人たちの生活、気持ちを知った上で、あるがままに、共に過ごしていくことだと思いました。

私は、ボランティア活動を通して多くの人達と出会いました。慣れない環境の中でも精一杯過ごす子ども達、震災当時のことや今の状況などを話してくれた人達、大切な写真を嬉しそうに見せてくれた人達。

私は、いつか学校で会う子ども達に今回の経験や出会った人たちが教えてくれたことを伝えていきたいと思います。それが、これからの私にできることだと思うからです。

**子どもの気持ちに応えたい、  
本当に支援が必要になるのはこれから**専門職学位課程  
高度教職実践専攻 1年 **千葉 直人**

私は、夏休みを利用して松島・女川・気仙沼の三か所で活動を行いました。その内容は、東日本大震災によって学習に遅れが生じた子どもたちへの支援です。私は宮城県で生まれ育ったにも関わらず、震災当初から何も力になっていないことにもどかしさを感じていました。しかし、この活動に参加することでこれからの宮城の復興を担う子どもたちの力になりたいと考えました。実際の活動は全国から応援に来た大学の方々と共に行いました。初めて教室に入るときはとても緊張したものの、子どもたちが笑顔で出迎えてくれたおかげで、その後は自然と笑顔で接することが



できました。このようないい雰囲気の中で子どもたちは集中して学習に取り組んでおり、私達もその気持ちに応えようと指導に力が入るなど本当にいい関係を保って活動できました。震災から一年が経ちましたが、本当に支援が必要になるのはこれからです。今後もこのような機会があれば積極的に参加していきたいです。





## 「ボランティア学生への御礼状」の裏側

環境教育実践研究センター 准教授 島野 智之

広報誌「あおぼわがば震災特集号」(p27)に掲載されている「ボランティア学生への御礼状」を読んでビックリしました。実は、このボランティアをしてくれた学生は、以下の2名 後藤俊(国語コース3年)と貝森義仁(国語専攻3年)であったからです。

御礼状に出てくるRQと言う名前は、震災直後、自然学校の友人達がつくったボランティア団体「RQ市民災害救援センター」の略称であり、現在の、一般社団法人RQ災害教育センターの母体です。3月18日には登米市にある廃校となった旧鱒淵小学校の体育館、雪の降る中にテント村を造り、ここから、山の裏にある南三陸や、気仙沼、石巻に、救援物資などを運び込みました。当時は、まだリアス特有の地形から谷間などに、まったく食料の支援のない集落などがいくつも孤立しており、自衛隊の支援もまだ届いていない状態でした。自然学校のサバイバルの知恵を生かして、有志が全国からあつまったのです。

後藤君と貝森君とは、環境教育の授業を通して交流がありましたが、このような情報を伝えると是非自分たちも行ってみたくて言ってくれました。ご家庭の許可もあり、ボランティア保険をかけ、また、炊き出しというボランティアに参加してもらいました。

月山神社は岩手県にあり、気仙沼市との境界にも近く被災地に近接し、津波被災者の方々の避難所となっていました。電気もガスもないここに数日泊まり込みながら、炊き出しに専念しました。大人数の避難所の炊き出しは力仕事です。沢山の食材を包丁で切って、大量の煮物をします。大きな鍋を洗うのも大変です。そのため、彼らの力は大いに役に立ちました。また、彼らの人柄から、多くの避難されている方々と元気に触れ合い、人々を勇気づけたその活動は、気仙沼や陸前高田のボランティアの間でも噂になりました。私も月山神社でがんばって、地域の方に大変に感謝されている若者がいることを知っていましたが、それが、後藤君と貝森君だということを知って、大変に驚きました。その方々からの感謝の手紙が本学に届いたことにも驚きました。

彼らの活動は、本当に誇りです。教員養成大学の学生ならではの優しい気持ち、分け隔てなく人に接することの出来る行動力、そして、なにより勇気があります。自分たちも大変だった時期に、よく頑張ってくれたという気持ちで一杯です。このことを知っていただき、彼らだけではない本学の学生の気質を誇りに思い投稿させていただきました。

### ボランティア学生への御礼状

4月下旬、1通のはがきが本学に届きました。差出人は、陸前高田市の避難所にいらした方です。内容を要約します。  
 「東日本大震災に出合っ、早いものです、1か月が過ぎ去ってしまいました。避難生活を夢中で送る中、RQ市民災害救援センターより派遣されてきたのでしよう、泊り込みのボランティアとして貴学の学生さんが、他大学の仲間とともに大きな大きな助っ人として活動してくれました。高齢者中心の避難所、86～87名が一室に寝泊まりしている中に身を横たえ、早朝の炊事から夕食後の後始末まで、1週間という長丁場にごまかに活躍して過ごしてくださいました。暖かい床の上で、寝食を共にして支援していただきました。とてもとてもありがたかったです。若者の活動をお伝えしたくペンをとりました。4月20日、わざわざおはがきをくださり、ありがとうございました。」



## 東六番丁小学校(震災直後の避難所の様子)

音楽教育講座 教授 吉川 和夫

仙台市立東六番丁小学校に避難した本学学生たちの様子を、同校校長・渡部力先生が知らせてくださいました。東六番丁小学校は、仙台駅に最も近い避難所ということもあり、帰宅困難や旅行中の避難者で溢れかえり、約1,800人が一夜を過ごしたそうです。

「学生諸君がよく動きました。貢献大でした。来校時の彼らの第一声は『避難所に入れていただけますか?』でした。奥床しさとか品の良さとか、究極の状況で使える言葉でないと感じたのが第一印象です。『避難所運営を手伝って』の一言を快く受け入れてくれた彼らの返事に心強さを感じました。皆川大輔君、佐藤圭子さん、戦場康平君(いずれも中等教育教員養成課程音楽教育専攻)らに避難所運営にかかわってもらいました。彼らは家族とも連絡が取れず、不安と心配で辛い日々だったと思います。そのような状況下において避難者のお世話をしている姿に芯の強さ、大人のたくましさを感じました。数日後、他の学生も加わり十数名になりました。12日、13日と、校内では避難所運営の体制を整えていくことに腐心していました。例えば、プールからの水くみ・トイレへの搬入、清掃、救援物資の受け取りと避難者数に応じた食事計画等々です。具体化するための第一線で活躍したのは彼らです。支援体制が整うことに合わせて必要とする活動内容が目に見えてくるものですが、例えば佐藤さんは、避難者への連絡内容を模造紙に書いて掲示するなどアイデアを出し、すぐ行動に移しました。しかも仲間や他のボランティアに指示を出しながら、率先垂範して動いていました。戦場君は、寒いとも言わず、お腹空いたともこぼさず、笑顔で活動しました。タイムリーに、そして創造的に動いている彼らに感謝し、避難所が地域住民主体の運営に移行した後も、彼らの控室は本部の隣におきました。臨機応変に人にかかわり、支援を必要とする人々に努力を惜しまない取組、環境をよりよくしていこうとする活動などは、教師にとって必要な資質や考え方だと思います。母校の後輩を頼もしく思えた避難所運営でもありました。」

こちらこそ、ありがとうございました。



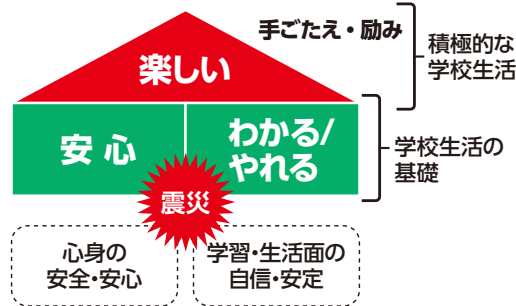
## 震災後の心の学校生活支援

教職大学院/  
特別支援教育総合研究センター

教職大学院 教授  
佐藤 静

多大な被害をもたらした東日本大震災の発生から1年が過ぎました。この間、多くの関係者・関係機関が心の支援（心のケア）の活動に取り組んできました。ごく限定されたもので恐縮ですが、ここでは私が関わった活動の一端を紹介するとともに、取組の視点等について述べさせていただきます。

平成23年の4月以降、本学の附属校園の教職員を対象とした心のケアに関する研修会や、仙台市内の小学校や市民センターにおける保護者対象の心のケアに関する研修会の講師を務めました。また、仙台市教育委員会が同年7月に立ち上げた心のケア推進委員会に委員として参加して、児童生徒に対する心のケアや健康調査の実施計画や実施方法等について検討してきました。同年10月に宮城教育大学・仙台市教育委員会・仙台市不登校支援ネットワーク主催による公開研究会「不登校支援と震災後の心の支援」（仙台市青葉区中央市民センター）を開催しました。震災体験を通して学校適応支援について考察するよい機会となりました。同年10月と12月に気仙沼市の災害時訪問スタッフを対象とした心の支援研修会の講師を務めました。同年12月には防災教育の推進を担う宮城県の教



職員を対象とした緊急研修会の講師も務めたところです。また、年度内には宮城県の小・中・高等学校の初任者研修で震災関連の心のケアの話をすることになっていきます。震災に伴う心の危機は今後も長期にわたって続くと思われ、引き続きこうした取組に関する支援が必要です。今回の震災は私たちの生活全体に大きな影響を及ぼしました。教育領域においては、児童生徒の学校生活全体を対象とする学校適応支援の視点が重要です。今回は特に長期にわたる心の支援が必要なので、私はそれを「心の学校生活支援」ととらえています（左図参照）。そのために、学習指導や生活指導、教育相談等の日頃の活動を基盤として、児童生徒の心身の健康と自尊心や自己効力感を回復・維持・向上させるための、息の長い総合的な取組が求められています。今後も、教職員やスクールカウンセラー、外部の専門機関等のチームによる継続的な心の支援と協働体制の整備・強化について支援していきたいと考えているところです。



## 被災地の学習支援活動に参加して

教職大学院 特任教授  
藤代 正倫

3月11日（金）14時46分、仙台市立第一中学校で被災しましたが、生徒・教職員誰一人怪我することなく無事に避難することができました。その後、ライフラインの停止から地域の方々が学校に避難され、避難所の設営や食事などのお世話をさせていただきました。

私は気仙沼市の出身です。テレビから流れる津波の映像を見たとき、とっさに実家も浸水したと思いましたが、後日実家の前の道路まで津波が押し寄せては来たものの、浸水は免れたことを知りました。

4月2日にはじめて気仙沼を訪れ、「家が流され、土台しか残っていない惨状」「タンカーや漁船が陸に打ち上げられている惨状」また「旧知の方々の訃報」に言葉を失いました。ただ涙だけが頬を伝わり、地元のために何ができるのだろうと、立ちつくすしかありませんでした。6月になり、本学で被災地の子供に学習支援事業を行うという話を聞き、迷わず手を挙げさせていただきました。

夏休みも残すところわずかという8月後半に、他大学（愛教大・福教大）の学生と本学学生・院生の総勢20名で、気仙沼市の3中学校を会場に、午前は小学生、午後は中学生という形態で、児童生徒（のべ約500名）への学習支援活動を実施いたし

ました。学生達は、「被災地の子供達の力になりたい」「子供に寄り添っていたい」「子供に少しでも笑顔になってもらいたい」という熱い思いで遠方から駆けつけてくれました。児童生徒は、絵日記や計算ドリル、読書感想文などの夏休みの宿題を持って集まり、「九九の暗記を聞いてー」とか「この計算問題をどう解くの？」という児童、「読書感想文をどう組み立てればいいのか?」「受験の対策はどうすればいいの?」という生徒など、学生に気軽に声を掛け、聞かれた学生も子供達と同じ目線になり、ノートを覗き込みながら丁寧に優しい言葉で答えていました。その時の子供達の目には輝きがあり、「分かった」とか「できた」と言った時の子供の表情には「笑顔」と「安心感・満足感」が感じ取ることができました。4年生の児童が、「宿題がたまっていたけれど、お兄さん・お姉さんに手伝ってもらって早く終わることができたので、遊びに行きたい」と話してくれた時は、わずかな時間でも子供達と一緒にやって行った学習支援活動の意味があったことを感じさせられたと同時に、先生の卵である学生にとってこの学習支援活動のボランティアは、「子供との接し方」や「学習の教え方」だけでなく、「教員になろうとする志」を高めることとなる貴重な体験でもあったように思われます。この被災地での経験がきっと「卵」を温め、「雛」へと成長させてくれることと確信しています。

## 教育復興支援センター活動(事業)実施表

9月以降分

※2月末 現在

| 日程                      | 実施場所                      | 支援内容・実施方法   |
|-------------------------|---------------------------|---|
| 8月25日～継続(年間)            | 仙台市立七郷中学校                 | 教員補助  |
| 8月25日～継続(年間)            | 仙台市立中野小学校                 | 教員補助  |
| 8月25日～継続(年間)            | 仙台市立荒浜小学校                 | 教員補助  |
| 8月25日～継続(年間)            | 仙台市立東六郷小学校・幼児学園           | 教員補助  |
| 9月5日～30日                | 岩沼市立玉浦小学校                 | 教員補助  |
| 9月10日                   | 宮城教育大学                    | 第4回未来づくりESDセミナー(震災復興と学校・地域の未来づくり)                             |
| 9月5日～30日                | 岩沼市立玉浦中学校                 | 教員補助  |
| 9月17日                   | 岩沼市立玉浦小学校                 | 運動会の補助  |
| 9月26日～30日               | 相馬市立中村第二中学校               | 教員補助及び自学自習支援  |
| 10月中旬～継続(年間)<br>(週1回程度) | 岩沼市立玉浦小学校                 | 教員補助  |
| 10月3日～継続(年間)<br>(週1回程度) | 岩沼市立玉浦中学校                 | 教員補助  |
| 10月28日、11月下旬            | 仙台市立将監西小学校                | 学校支援プログラム(音楽教育講座)仙台市立将監西小学校での総合学習に対する支援                       |
| 10月29日                  | 青葉区中央市民センター・ホール           | 不登校支援と震災後の心の支援(話題提供とパネルディスカッション、コーディネーター佐藤静教授)                |
| 11月5日                   | 岩沼市岩沼西小学校                 | 岩沼市市制40周年記念事業「理科大好きフェスティバル」のブース活動の補助(村松隆教授もブース参加)             |
| 11月5日                   | 気仙沼市立大島小学校                | 学校支援プログラム(技術教育講座)大島小学校児童を対象とした「LEDランタン工作教室」                   |
| 11月6日                   | 石巻市                       | 全国生涯学習ネットワークフォーラム2011 第一分科会の補助                                |
| 11月6日                   | 文部科学省                     | 全国生涯学習ネットワークフォーラム2012 第五分科会ブースセッションの出席                        |
| 11月12日                  | 宮城教育大学                    | 第5回未来づくりESDセミナー(震災復興ボランティア報告会)                                |
| 11月15日～3月21日<br>(週1回程度) | 仙台市立折立小学校                 | 放課後の学習支援  |
| 11月19日                  | 仙台演劇工房 10-BOX             | 復興への子どもの時間～ヤギと癒しと～ ふれあいコーナーの実施補助(P29「TOPICS」を参照)              |
| 11月27日                  | 特別支援教育支援員講習会              | 「災害と心のケア」講師:関口博久教授<br>「視覚障害のある子どもの教育指導」講師:猪平真理教授              |
| 12月6日、8日、1月12日          | 防災教育等推進者緊急研修会             | 災害を経験した子どもたちの心の理解とケア 講師:宮前理教授(12/6、1/12) 佐藤静教授(12/8)          |
| 12月10日、11日              | 石巻市相川運動公園<br>仮設住宅サポートセンター | 第6回 未来づくりESDセミナー  |
| 12月20日                  | 東北福祉大学                    | 東日本大震災における東北地区大学支援プロジェクト報告会                                   |
| 12月21日、26日              | 大崎市立鹿島中学校                 | 自学自習支援  |
| 12月25日～27日              | 栗原市教育委員会                  | 自学自習支援(冬の学府くりはら塾)   |
| 12月26日～28日、1月4日～6日      | 岩沼市立玉浦中学校                 | 自学自習支援(冬休み勉強会)  |
| 12月26日、27日              | 岩沼市総合体育館                  | 自学自習支援(ニコ・ニコ・ウィンタースクール)                                       |
| 12月26日、27日              | 大崎市立真山小学校                 | 教員補助  |
| 12月26日、27日              | 大崎市立田尻中学校                 | 自学自習支援  |
| 12月26日、27日              | 大和町立大和中学校                 | 自学自習支援(たいわウィンタースクール)  |
| 12月26日、27日              | 大和町立宮床中学校                 | 自学自習支援(たいわウィンタースクール)  |
| 1月4日～6日                 | 柴田町船岡公民館                  | 自学自習支援(冬期受験力アップ学習会)   |
| 1月5日、6日                 | 大郷町立大郷中学校                 | 自学自習支援(大郷町ウィンタースクール)  |
| 1月13日～15日               | エスバレスクエア<br>(仙台市立榴岡小学校)   | 榴岡小学校と連携による「折り鶴プロジェクト」イベントでの運営補助、参加小学生とのオブジェ作成                |
| 1月18日                   | 気仙沼ホテル観洋                  | 第7回未来づくりESDセミナー   |
| 2月5日                    | せんだいメディアテーク・<br>オープンスクエア  | 第8回未来づくりESDセミナー環境フォーラムせんだい2011 「“環境”震災で見えてきたこと」               |
| 2月11日                   | TKP仙台カンファレンスセンター          | 学校・地域連携研究シンポジウム「夢と志をもつ子どもたちを育てるために<br>～復興へ向けて!踏みだそう、学校と地域で!～」 |
| 2月16日                   | 東北大学・片平さくらホール             | グローバルセミナー東北(震災復興と生態適応)でのボランティア活動報告及びポスター発表                    |
| 2月18日                   | 気仙沼市立気仙沼中学校               | 気仙沼市立小学校児童を対象とした「図書館実験工作教室」(講師:内山哲准教授)                        |
| 2月19日                   | 特別支援教育支援員講習会              | 「障害が重複している子どもへの支援」(講師:菅井裕行教授)<br>「発達障害等のある子どもへの支援」(講師:野口和人教授) |

# 仙台の元気と希望の光を伝える



## 村林 いづみさん

青森県青森市出身、2003年、宮城教育大学生涯教育総合課程文化環境コース国際文化専攻卒業。学生時代よりラジオ番組出演、制作にも携わる。2004年よりフリーパーソナリティー、ナレーター、司会として活躍中。またスタジオム、練習場で、サッカーJリーグ・ベガルタ仙台の取材を精力的に行う。趣味はジャズダンス、スポーツ観戦、旅行。宮城県サッカー4級審判員の資格を持つ。

## 人をつくる 社会をつくる

卒業生の軌跡

第5回

村林いづみさんは、フリーのアナウンサーとしてさまざまな場面で活躍していらっしゃいますが、中でも、衛星放送のスカパー！サッカー中継でのベガッ太さん（ベガルタ仙台マスコット）との軽妙なやり取りは、他のサポーターもわざわざチャンネルを合わせるほどの人気。東日本大震災後、仙台の街、そして仙台を本拠地とするチームが、困難な状況から立ち直っていく姿を伝えて続けています。久しぶりに母校に来て頂き、お話を伺いました。平成23年12月22日聞き手・構成＝広報紙プロジェクト 吉川和夫

■ 現在のお仕事について教えてください。

フリー・アナウンサーとして、ラジオ番組のパーソナリティーやサッカー中継などのテレビ番組に出演しています。CMや企業VTRなどのナレーションや、イベント、式典、講演会、ウエディングの司会などもやっています。

■ 学生時代に、すでに放送の仕事をしていたということですが、そもそものきっかけはありますか。

小学生までさかのぼります。私は青森出身で、小学校4年生の時に仙台に引っ越してきたのですが、津軽弁の訛りが強くて、自己紹介をした時みんなに笑われたのです。なぜ笑われているのかわからなかったのですが、後から仲良くなったお友だちに「すごく訛っていて、おもしろかったよ」と言われました。でも、本人はもう傷ついてしまっていて、「ああ、訛りを一生懸命取らなきゃいけない」と思って、テレビでアナウンサーの喋りをジッと見て、「ああ、ここはこう、訛らないんだな」と、子どもなりに研究していたのです。5年生か6年生ぐらいの時、国語の授業を担当してくださった教頭先生が、本読みをすごく褒めてくださったので、「これだ」と思いました。それから、中学校、高校と放送部に入って、アナウンスをしたり朗読をしたりと、将来的には番組に出てみたい、作ってみたいというところに繋がっていきました。すべての始まりは訛りです(笑)。

■ 褒めてくれた先生あったんですね。

そうですね、やっぱり先生の一言って、すごく大きいと思います。教頭先生にあそこで褒められなかったら、全く違ったかなと思いますね。

■ もう津軽弁を喋ることはないのですか。

それが、高校でまた青森に戻った時、すでにすっかり訛りが取れていたのですけれども、友だちと仲良くなるために、使い分けができるようになりました。今でも青森に帰ったら、すごく訛ります。バイリンガルです(笑)。大人になってから感じる訛りの良さというのもあったり、一度は捨てたいと思ったものですけれども、今はその津軽弁が誇りというか、自分の中とても温かいものになっていますね。

■ 3月11日東日本大震災の時はどうなさっていましたか。

翌3月12日が、サッカーのベガルタ仙台ホーム開幕戦だったので。震災当日、午前中トレーニングを取材して、自宅で中継用の資料を作成している時に揺れが来ました。夕方になって、Jリーグは全国で中止と連絡が来て、それからすべての仕事ストップしました。1週間ほどして、お世話になっているケーブルテレビ局から、災害情報を24時間伝えているチャンネルがあるの、キャスター、ナレーターをやってくれないかと声をかけて頂きました。4月の半ばくらいまでは1ヵ月、毎日朝から夜まで局にいて、どこで何が買えるとか、いつから電気の工事が始まるといった災害情報のアナウンスを続けました。

■ 私たちは、そういう放送を命綱のように思っています。伝える立場としては、どんなお気持ちだったのでしょうか。

局の方針が「希望のあるものを伝えていこう」というものでしたから、私の仕事は「どこそこのお店が、何時にオープンして、どういっ物を売ります」とか、「ライフライン、ここまで復旧してきていますよ」とか、他には注意喚起

に関する事など、情報だけを淡々とお伝えするものが多かったのでも心はそんなに乱れなかったですが、民放テレビ局などで仕事をしている友人たちは、放送局も電気が途絶して自家発電しているようなところも多くなって、真っ暗で寒いスタジオの中で死亡者のお名前を読み上げていくという、すごくつらい経験をしたようです。私に聞けば、言え、後から、見てくださった方々が「助かったよ」と声を掛けてくださったので、地震の後何の役に立たないんじゃないかと思っていたのですが、少しは役に立てたのかなと思えることができて救われましたね。

■ サッカー中継のお仕事も中断したんですね。

ベガルタ仙台は、ほとんどの選手が仙台を離れ、チームが解散している状態でした。仙台では練習場が確保できないし、そもそもサッカーができるような街の雰囲気でもなかったから、どうなるのか不安でした。でも、3月末に泉パークタウンの練習場に集まった選手を取材して、サポーターや仲間の取材陣の顔を見た時に「ああ、またサッカーができるかもしれない」と思いましたね。そして、4月23日、Jリーグ再開試合となった川崎市等々力競技場での川崎フロンターレ戦中継から担当を再開させていただきました。

■ 雨も風も強い、寒い日でした。

ピッチサイドで中継をしていて、傘が5本だめになりました。今考えると、試合展開は全く覚えていないのですが、気づいたら試合が終わっていて、みんなが泣いていました。試合後のインタビュで、逆転勝利を飾ったベガルタ仙台の手倉森誠監督は大泣きしていたのですけれども、ヒーローとなった鎌田次郎選手は笑顔で清々しくインタビュに答えてくれて、「ああ、何で幸せなんだろう」と思いましたね。サッカーができる喜び、毎週末サッカーがあるってこんなにうれしかったんだ、楽しいことだったんだっていう喜びの中で中継をさせて頂けて、本当に嬉しかったです。



**再開後、ベガルタ仙台の試合の中継を伝え続ける中で、感じるいろいろなおありだったのではないのでしょうか。**

そうですね。1年間を通してのプランというのは全く考えられなくて、サッカーそのものなのか、災害に遭ったこの大変さなのか、目の前に来るものとひとつずつ戦ってきた。選手たちもよくそんな話をしますが、それがすごく理解できて、その時来た現実と向き合いながら、とにかく1年間やってきたという感覚があります。選手たちが思っていること、被災地・宮城にサッカーチームがあつて、ここでサッカーをすることの意味などを、どうしたらもつと伝えられるだろうと考えながらの1年間でした。ベガルタというチームを愛してくれる市民の方々がいて、その市民の方々が、本当は自分たちも大変なのに、ベガルタがひとつ勝つこととか、ひとつゴールを決めることで元気になっていくという話をしてくれます。私は、そういう姿を全国に発信できる立場にありましたので、選手の頑張りを、それを受けてみんなが立ち上がっていく姿をどう伝えよう、どうしたらもつと伝えられるだろうと考えながらの中継でした。

**まさに、仙台が元気になっていく姿を伝えていたのですか。**

東京と繋ぐようなテレビ出演の中でも、「これだけ宮城は元気になっていく」という反面「やっぱりまだこれだけ大変でもある」ということを正確に伝えられるのは、近くに住んでいる自分なかなと思えます。私自身が住んでいるのは被害が割合少ないエリアです。でも、本当にごく身近に、家を流され、家族も失いという方がいて、そこを忘れないように暮らしながら、どう正しく伝えていけるだろうと、難しさも感じながら考えていました。

**「サッカーファミリー」という言い方がありますね。**

どのチームも、すごく応援してくれました。浦和や千葉からは練習場を借りました。他チ

ームのサポーターの皆さんは、仙台に行くことが一番の支援だ、仙台のアウェー席をいっぱいしようと言ってくださって、車に物資を満載してやってくる、それをチームや役所に託していく。宮城のものをいっぱい食べて、お土産を買って。さらに、試合の前日や翌日に沿岸地域に行つて、ボランティアをするサポーターさんもいました。他のプロスポーツでもあるのかも知れないですけども、サッカーファミリーの繋がりをすごく強く感じました。

**各チームの選手、スタッフ、サポーターが、いち早く支援活動に動きました。**

今年特にすばらしかったのが、川崎フロンターレとの結びつきでした。4月23日のJリーグ再開試合には、大きな大きなフラッグにメッセージをいっぱい書いて掲げたり、応援のVTRを流したり、川崎のスタッフ、選手、サポーターが、ベガルタ仙台を迎え入れる舞台を整えてくれました。そんな中で試合ができたのは、本当に嬉しかったと選手たちはみんな話していましたね。また、10月の仙台ホーム川崎戦の時には、仙台の席にフロンターレのタオルマフラーやグッズを持ったサポーターが、フロンターレの席には仙台のグッズを掲げるサポーターがいて、お互いのチャント（応援の歌）を歌いあうという、普通ならまずあり得ない光景がありました。監督もそれを見て、「これは一体何だ」「フロンターレが来たときに醸される雰囲気って、何だろうね」と話していました。そういう繋がりが、結びつきの強さは、やはりサッカーならではのすばらしい文化なのかも知れません。

**被災地のチームということで、選手たちの意識にも変化があったのでしょうか。**

いろいろ聞いてみると、サッカー選手であることの意味を改めて考え直した1年だったし、サッカー選手でよかったと思つたと思う反面、サッカー選手として何もできなかったと感じた選手もいたようです。そういう姿を1年間近くで取材をさせていただいたのかなと思つています。

震災直後、何人かの選手が自分も何かしなきゃと相談をして、まずはボランティアセンターに行つてみよう、自転車でボランティアセンターまで行つたそうです。体力には自信があるんで「何でもできるから言ってくれださ」と申し込んだら、「サッカー選手だから、やはりサッカーをしてほしい」と言ってくれた。そこで小学校に行つてみると、避難していた子どもたちや近隣の子どもたちが100人くらい待っていたそうです。



遊び場も、遊ぶ手段も、何もなかったのですよね。体も動かせず、思いつ切り大声出して駆け回ることでもできない雰囲気だった時で、そんな子どもたちと一緒に

に、とにかくはしゃいできた。そうしたら、もうそれまでの我慢が爆発したかのように、みんな大きい声を出して、みんな走り回って、汗びっしょりかいて帰っていったそうです。

**あの寒い時期に汗びっしょりって、すごいですね。**

一方で「今年のベガルタ仙台はどうだろう」と注目され、頑張らなきゃいけない立場の重さ、背負わなければならない荷物というのが余りにも重いなと思うこともあつて話を聞いていたのですが、選手たちは非常にたくましく、それはここでサッカーをやらせてもらう自分たちが背負っていかなければいけないのだと話をしてくれました。Jリーグという比較的恵まれたトップリーグなのでサッカーが続けられていますけれども、同じ県内でも体部になつてしまった地域リーグのチームもあります

ね。そういう中で、この宮城でサッカーができるサッカーをさせてもらえるという意識が強かつたと思います。監督が、ミーティングの際に毎回「希望の光になろう」と、選手たちにもマスクにも話しかけていました。そういう言葉を繰り返して聞いたり、折にふれて被災地に赴いたり。今シーズン4位という成績は、選手たちそれぞれが忘れないように意識をしながら、また個々に自分の目標を持って頑張つて戦い抜いた結果かなと思います。でも、多分選手たちはとても大変だったと思います。

**村林さんは、学生時代から将来についてのはっきりした目標を持っていらつしやいました。が、今の学生たちにアドバイスをお願いします。**

そうですね、なるべくいろいろな年代、いろいろな国籍、いろいろな考え方の人と会つて話をする事です。私自身の学生時代を考えると、いつも決まったところで決まった仲間と過ごすのも楽しかったですが、若いうちにいろいろな方と触れ合うといいなと思います。それから、学生時代に旅行にもつと行つておけばよかったですね。国内でも、海外でも。大学時代にしたことで無駄だったなと思うことは一つもなく、もつといろいろなことに挑戦すればよかった。サークルに入ることでもいいし、いろいろなアルバイトをすることもいいし、自分の専攻に関係ない授業も受けたら、それですごく素敵なことかと思えます。大学時代に自分の引き出しになって幅を広げてくれる経験だと思つて、人と話すことや旅行すること、授業を受けること、何でもやつた方がいいと思います。

フリーになつた時には、すごく不安もありました。でも、味方になつてくれる人がいたからやつていけたのかなと私は思います。その道の先輩でもいいし、自分を助けてくれる、指南してくれる、支えてくれる、叱ってくれる、自分のサポーターになつてくれるような人を1人で多くつくといいですね。

「第2特集」

カリキュラム、指導法、教材の開発をサポート  
宮城教育大学附属・小学校英語教育研究センター

## 小学校英語活動を一緒に考えましょう！



### 宮城教育大学附属・小学校英語教育 研究センター設立にあたって

小学校英語教育研究センター長

板垣 信哉  
いたがき のぶや

昨年2月、本学に小学校英語教育研究センターが開設されました。年度末(2月28日)の多忙な日々にもかかわらず、多くの来賓の方々をお迎えし、センターの開所式を開催しました。本学では、平成19年度に、初等と中等の教員養成の統合型を改組し、初等教育教員養成課程(定員188名、14コース)を独立させました。その際、小学校外国語(英語)活動の「必修化」を想定し、全国でも数少ない「英語コミュニケーション・コース」を設けました。すでに、昨年3月には、第1期生の卒業生を輩出し、多くの方々が教壇で健闘しております。今後も、「英語活動」に積極的に取り組む「小学校教員の養成」は本学英語教育講座の責務と考えております。初等教育教員養成に「宮教大独自の理念」をもつて取り組んできた本学の歴史を考えますと、今回の小学校英語教育研究センターの開設は、本学の新たな歴史の一頁として、その教育的、社会的役割を果たす責任の重さを感じております。幸い、宮城県、仙台市の両教育委員会のご理解もあり、各

教育委員会から客員教員と兼務教員、協力研究員をお迎えすることができ、期待にこたえたいと考えております。

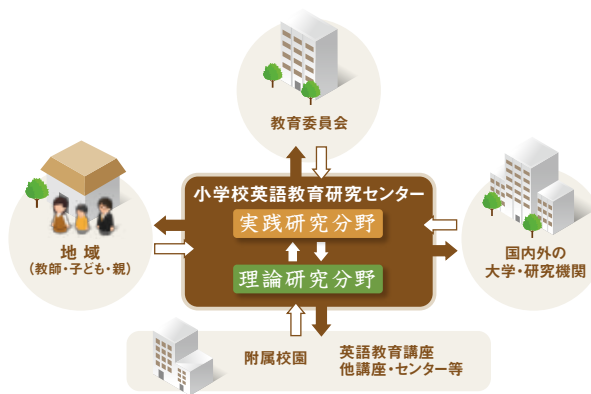
小学校外国語(英語)活動の導入の議論は20年以上の歴史がありますが、平成20年3月告示の「新小学校学習指導要領」に基づいて、小学校5年生・6年生を対象に「必修化」が決定されました。この20年以上の議論の「重み」を考えますと、今回の「必修化」の決定は、「なんととしても、成果を上げなければならぬ」状況であり、日本の英語教育の歴史上で重要な政策決定の一つであると考えられます。しかしながら、必修化に伴い、学校現場、行政、教員養成での諸課題の多くが今後とも継続的に検討、議論を必要としております。

以上の状況を踏まえ、小学校英語教育研究センターの目的、研究分野、特色、活動組織は以下のとおりであります。

1)目的: 学校現場の多様な支援の要請・要望に応えると同時に、活動実践の研究開発及び理論的研究、英語活動・英語教育と関

連する国語教育、バイリンガル教育などの研究交流を行う、

2)研究分野: ①実践研究分野として、「学校研修会などへの講師派遣」「現職教員講座の企画と実施」「大学生・留学生の派遣」な



ど、②理論研究分野として、「指導方法・カリキュラム開発」「小学校英語活動と中学校英語教育の『接続』の研究」「フォーラム、セミナーの企画・実施(理論と実践の融合を目指して)」など、

3)特色: ①センター教員として、英語教育は勿論、関連する教育学、日本語教育などの専門家が参加している、②センター教員が現職教員との共同の検討会などを継続的に実施、常に現場の諸課題に関する「継続的な相談、指導、助言」が可能な体制を構築している、③小学校英語活動と関連するバイリンガル教育、イマージョン教育、言語教育全般に関する情報提供が可能である、などをセンターの具体的役割と考えている。

4)活動組織: 本学の英語教育講座・附属校園は勿論、宮城県・仙台市の教育委員会、地域(教師・子ども・親)、国内外の大学・研究機関との実践面及び理論面での密な連携がセンター活動の前提であり、その促進に努める。



▲H23.10.30小学校外国語活動ワークショップにて挨拶を行う板垣センター長



## 英語教育フォーラム

### — 小学校英語活動の充実と今後の課題 —

小学校英語教育研究センター 兼英語教育講座講師

鈴木 渉 すずき わたる

宮城教育大学附属・小学校英語教育研究センターでは、平成23年12月3日(土)「小学校英語活動の充実と今後の課題」とのタイトルで英語教育フォーラムを開催しました。本フォーラムは、今年度から小学校高学年で必修化された「外国語活動」の充実と今後の課題、小・中・高校と繋がる英語教育の在り方、コミュニケーション能力について、基調講演とパネルディスカッションを通して理解を深めることを目的として行われました。



午前の基調講演 Iでは、渡邊倫子氏(文部科学省初等中等教育局外国語教育推進室 室長)から「小中高全体を見通した英語教育の改善と充実」と題した講演が行われました。渡邊氏からは、グローバル化を巡る日本の現状、日本の外国語教育の現状、新学習指導要領、小学校の外国語活動、外国語教育に関する政府や文部科学省の取組、などを分かりやすく説明していただきました。

午後の基調講演 IIでは、板垣信哉氏(宮城教育大学附属・小学校英語教育研究センター 長・宮城教育大学教職大学院 教授)から「英語コミュニケーション能力の『素地』と『基礎』」と題して講演が行われました。板垣氏は、外国語(英語)教育の目標、学習指導要領、言

語能力の熟達化、外国語の自然な熟達化などを第二言語習得理論の観点から多岐にわたって説明されました。

午後のパネルディスカッションは、「小学校英語活動の充実と今後の課題」と題して、まず、佐々木弘晃氏(宮城県教育庁義務教育課 指導班 指導主事)、小野順氏(仙台市立田子小学校 校長・仙台市小学校英語活動研究部会 会長)、リース・エイドリアン氏(宮城教育大学 講師)から、宮城県の現状、現場での具体的な指導法、小中連携(小中高連携)などについて発表していただきました。その後、司会の鈴木、基調講演者の渡邊氏を加え、会場の質問に答える形で有意義な意見交換を行うことができました。

約14名の参加者を迎え、意義深い意見交換は、今後の小学校外国語活動は勿論、及び小中高全体を見通した英語教育への関心と期待の高さを示すものでありました。参加者からは、「文部科学省の立場がわかった」「現場の声がよくわかり新鮮だった」とさまざまな教育関係者に向けて研修会情報等、いろいろな発信していた「センター」と現場とのネットワークの構築をしてほしい」等々、たくさんの方々の意見や要望が寄せられました。



▲パネルディスカッション 小学校英語教育研究センター 兼 英語教育講座講師 リース・エイドリアン氏の講演の様子



## ワークショップ

### 小学校外国語活動におけるICT活用の有効性

大野田小学校・教職大学院・小学校英語教育研究センター協力研究員

さかりしげと 栄利 滋人

平成23年10月30日(土) 宮城教育大学を会場に、小学校教員(約40名)を対象に標記のワークショップを実施しました。以下は、具体的な活動例です。

#### 1 紙媒体の教材をパワーポイントでデジタル化する。

Alphabet songの歌詞とイラストの slidesを作成し、パワーポイントでレビに映しながら曲を聞かせる。



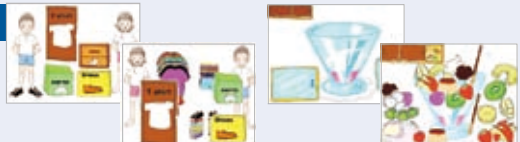
#### 2 プレゼンテーションスライドに曲の音声を貼付ける。

13~19の数字のteenを「おもちゃを伸ばす」イラストで、30,40の数字の -tyを「切る」イラストでイメージ化し、音声を流しながら提示する。



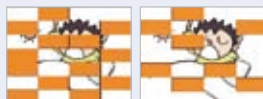
#### 3 イラストを拡大縮小、移動させる。

お店の場面で、英語ノートのCDを聞かせ、色やサイズ、枚数などの会話を楽しむ。服を移動したりサイズを拡大したりし、SMLの調整をする。フルーツパフェの活動で、好きなものをオーダーしていく。戸棚や冷蔵庫にいろいろな材料があり、大きさや個数のやりとりをする。



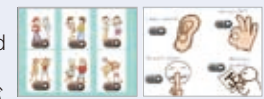
#### 4 イラストをブロックで隠し、ブロックを取って考えさせる。

英語ノートCDのチャンツを聞かせながら、ブロックで隠されている絵は何をしているところか考えさせる。  
「Get up!」



#### 5 イラストとネイティブ音声を組み合わせる。

Classroom Englishや世界の挨拶の発音の音声をイラストに貼付け、画面をiPadで拡大しながら音声を聞かせる。ワークショップでは、イラストを提示しながら音声を聞かせることができるICT教材の有効性を伝えることができた。特にiPadは操作がしやすく、教材作成も容易で、活動の広がりが期待できる。



## 40th MUE festival

今年度の宮城教育大学大学祭は第40回という節目の年を迎えました。昨年度の3月11日に発生した東日本大震災もあり、私たち一人一人が抱えている「想いを大学祭を通して伝え、それを心の糧にして欲しい」と願いを込めたテーマを「四重奏―カルテット―」としました。また、このテーマは私たち学生の「想い」と来場者の方々の「想い」を重ね、大学祭という一つの曲を奏でようという思いが込められています。

宮教大大学祭の特徴は、大學生とご来場された方々が一緒に楽しめるという点です。従来からある「宮教リーグ」縁日「スタンプリー」にはよりよいものと思い、試行錯誤を繰り返しました。新たな試みとして、昨年度まで大学祭実行委員会が企画・運営していた「こどもランド」を、宮教大のコース・専攻に任せることで学生参加の新たな形を作りました。加えて、昨年以上にサークルや研究室などの参加も増え、構内は賑やかな声で彩られました。「芸人ライブ」では「ミラクルひかる」さんを迎え、老若男女問わず盛り上がりを見せました。また震災に関して、被災地へのボランティアへ参加した全国の学生を集めての「ボランティア報告会」の開催や、仙台市内の大学と連携して募金活動を行うなどの他大学との連携をより活発にしました。



第40回という節目の年に、私たちは多くの人の手を借り大学祭という曲を奏でました。そしてこの曲の音色は他大学には見られない宮教大だけの音色です。その音色を大切にしながら、新たな大学祭を奏で続けることを願っています。

(第40回宮城教育大学大学祭実行委員会  
実行委員長 濱道優人)



# MIYAKYO NOW

みやぎょう



## 第63回教養講座

12月7日(水)、本学教養会館にて第63回教養講座を実施しました。

学生の教養を広げる機会を提供するとともに、一般市民等にも案内して、大学との交流を図ることを目的とする本講座。今年度は、仙台市北山にあるアトリエ自遊学校のあきらちゃん&ラーメンちゃんを講師に迎え、「子どものころと子どもにも出会う大人のころ」子どもの達人に出会う「あそびうたワークシヨップ」を開催しました。

子どもは遊びを通じて自分を表現したり、友達を作り関係を深めていったりすることを毎日自然に行っています。

あそび歌等の活動を通して、全国的にたくさんの子とも達と関わってきたあきらちゃん&ラーメンちゃんの個性豊かな講師2人の軽快なお話と歌や踊りにより、参加者も皆思わず音楽に合わせて楽しく踊りだしてしまおうような雰囲気会場全体が包まれ、遊びを使って子供達とコミュニケーションすることの魅力を存分に感じながら、より実践的に学ぶことができました。

会場には学生の他に、一般の来場者も含め65名の参加者が詰めかけ、教養講座は盛会のうちに閉会となりました。



## カナダ・トロント「新企会」からの 東日本大震災被災学生への奨学金贈呈

カナダ・トロントに移住している日本人企業家が組織する「新企会」(Association of Japanese Canadian Business and Professionals)から、平成23年3月11

日の未曾有の震災により精神的・経済的な打撃を受けながらも、教師を旨指して被災地の復興に向かっていくこととしている学生に対し、奨学金を授与したいとの話をいただき、12月8日、本学で奨学金の贈呈式を実施いたしました。



▲高橋学長から新企会へ礼状と記念品を贈呈

松本氏からは、この贈呈式に先立ち、カナダで行われた奨学金授与式に本学からスカイプ(国際通話)で参加した被授与者4名のスピーチに聴かれて、「皆さんを元気づけるため、奨学金の授与を決定しましたが、逆境のなか頑張っている様子を打たれ、カナダの会員一同、逆に元気をいただきました。日本人という視点よりも、地球人という視点が大事だと思っています。今回の出合いが、学生の皆さんの今後に生かされることを願っています。」との祝辞がありました。

被授与者を代表して、教職大学の被災学生からは、「震災で金銭的、精神的にダメージを受けて、勉学を諦めようと考えたこともありましたが、このような困難な時だからこそ、広い知見で現状をしっかりと見据え、新たな教育ができる教師も必要だと思い大学院に進学しました。ここにいる3人の学生も同じ気持ちで学生生活を送っております。常に感謝の気持ちを忘れず、将来を担う子どもたちを育てていきたいと思えます。」との感謝の言葉がありました。



▲「新企会」松本会長の挨拶

## 『しようがい学生支援室』PEPNet-JAPAN賞受賞

国立大学法人筑波技術大学、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(OPNEDnet)主催による第7回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムが11月6日つくば国際会議場を会場に開催されました。

このシンポジウムでは、全国の聴覚障害学生の支援に力を入れている大学による実践事例コンテストが行なわれていますが、今年のコンテストで宮城教育大学『しようがい学生支援室』聴覚しようがい部学生会運営スタッフによる実践事例が見事TOP20の栄冠(最優秀)を受賞しました。

昨年のシンポジウムでは、惜しくもアイデア賞(3位)でしたが、一昨年の受賞から2年ぶりの快挙となります。

今回のコンテストでは、運営スタッフが日頃から行なっているティーカー養成、スキルアップのための練習会、困ったことの相談や解決のための反省会などを行ない情報保障のさらなる向上をめざした活動を行なっていく中で、スタッフ同士の交流がより密になるような取り組みが紹介されました。



具体的には、スタッフそれぞれの所属や学年などがわかるように、支援室内に「みんなのかお」というティーカー・聴覚しようがい学生の写真付きパネルを貼ったり、通訳の様子や感じたことを書き込める『何でもぶつけるノート』を用意し、普段顔を合わせることの少ないティーカー同士の交流にも役立てています。

こうした工夫が交流や情報交換の場となり、みんなの輪が広がっていくことが期待され、今回の受賞では、こうしたアイデアが高く評価されました。

## モニュメント「こち」の除幕式を挙行

本学 山下直治名誉教授が所蔵していたモニュメント「こち」が、平成23年12月に本学へ寄贈され、2号館前の桜の木の下に設置し、その除幕式を平成24年1月11日(水)に前日の雪により、あいにくのコンディションとなりましたが、教職員が見守る中、高橋孝助学長、寄贈者である山下直治名誉教授、「こち」の制作者である宮澤直子(旧姓:佐々木)氏により行いました。

「こち」は、宮澤氏が本学大学院教育学研究科美術教育専修在学中に「見ても触れても心地よい形」をコンセプトに平成15年度修了作品として制作され、それを山下名誉教授が譲り受け山元町の自宅に設置を予定されていたのですが、平成23年3月11日の東日本大震災により自宅が被災したため、大学を訪れる多くの方々に「こち」に触れて楽しんでもらいたいとのことで大学へ寄贈されたものです。

また、制作者の宮澤氏は、「学生さんや大学を訪れる方々にひとときの心地よさを味わっていただければと思っています。」とコメントしています。



▲左から宮澤直子氏、高橋学長、山下直治名誉教授

## Campus Life



宮城教育大学長  
(平成18年8月～平成24年3月)

## 高橋 孝助

私は昭和50年(1975年)6月1日付けで助教授を拝命しました。通常は4月1日付けで発令されるのですから、私はもう駄目になったものと思い(周囲もそう思っていた)、某私大で飯を食える程度の非常勤生活に入っていたのですが、ある日6月着任の連絡があり、あわてて仙台にやってきたのでした。この年の梅雨は、じめじめしているだけでなく大変寒くて、湘南産まれの家内には辛かったようです。おまけに頂戴した給料の「低さ」、アパートの「ひどさ」(大学宿舎に入居できたのは3ヵ月後)に、家内にとって仙台生活の始まりは良いものではなかったようですが、私は、教育大学にとにかく就職できたのです。

5人の3年生が「東洋史演習」を受講しようと、待っていてくれました。私と宮教大生との出会いです。以後、新課程の時期(1996年度から2006年度まで、この時期国際文化専攻向けと東洋史専攻向けの二つの演習を開講していた)を含めて28年、私の演習を卒業した学生は150人を超えます。講義や課外ゼミ等を含めると数え切れないほどの学生に「東洋史」(と言っても中国近現代史)を語り続けてきたことになるのですが、中国は周辺を巻き込みつつ「紅い糸」、「文革」、「大学紛争」、「改革開放」と激しく変動し、私達研究者を悩ませ続けていました。私の「想い」と

関係あるのか無いのか、彼ら、彼女たちは自由に羽ばたいています。

もう一方で私が直面した問題は、たとえば私のように小・中学校の学習内容に直接関係しない専門を担当する者(しばしば「お前はミスキャスト」と言われた)にとっては教育大学で教育研究に従事することの意味、一般論として言い換えれば、単科教育大学における教員養成と専門教育の統一、いわば大学論です。いろいろなめぐり合わせで、私は、いろいろな委員会を渡り歩き、また修士課程の設置、新課程の立ち上げ・廃止、法人化、人件費の削減、教職大学院の設置、等々にかかわってきましたが、心底ではこの大学論への解答を模索していましたし、今はますます必要な気がしています。私は教育学者ではありませんので、解答を披瀝する必要はありませんが、薫陶を受けた先輩や一緒に仕事をしてきた同僚、そして生煮えの議論を聞かされた同窓生には、確たる実績を残せぬまま退職するに至ったことは残念であると申し上げたいと思っています。

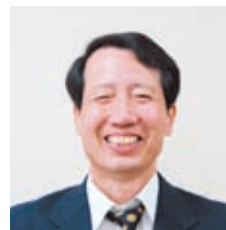
お世話になった先生方



## 国を動かした学生たちに 惜しめない拍手を

宮城教育大学  
連携担当理事・副学長  
(平成19年4月～平成24年3月)

## 阿部 芳吉



宮城教育大学の部活動(2012年学生ランキング第4位)の活性化等を図り、教員採用試験合格率(本年は132名現役合格)を高め、世に有為な学生を送り出すことを目的に母校に5年間勤務させていただき、その初期の目的は概ね達成することができました。この成果は今後も右肩上がりに推移していくものと確信しているところですが、これもひとえにご支援賜りましたキャリアサポートセンターや関係各位、そして学生たちのお陰と、心から感謝しております。

ところで、第84回の選抜高校野球大会に宮城県の石巻工業高校が、創部以来初めて出場(21世紀枠)することになり、このことは多くの人々に夢と感動を与えてくれました。これは野球部員たちが、東日本大震災後も困難に立ち向かって練習に励んだことや、一時避難した市民のためにトイレの水を運んだりしたボランティア活動が認められたゆえのものです。

さて、ボランティア活動と言えば、本学の学生たちも大奮闘しているところです。震災後仙台市内の小、中学校6校を皮切りに、福島県の相馬の子どもたちにも学習支援ボランティアとして寄り添ってきました。このことが国からも認められ、昨年の第三次補正予算で約1億1千万円(教育復興支援センターの建物は平成25年2月に竣工予定)が宮城教育大学に委ねられました。



この震災ボランティアは息の長い営みとなりますので、学生諸君にも自ら参加して、自分を磨いてほしいと切に願っている次第です。

最後に、これまで支えてくださった方々に心から御礼を申し上げますとともに、宮城教育大学のさらなるご発展をご祈念させていただきます。

## 林先生の落とし物

国語教育講座 教授

## 渡辺 善雄



1985年に三重大学から移り、27年間お世話になりました。最初に学長たちに対するあまりに激しい否定的な動きに驚きました。教授会は反学長派の恐喝まがいの発言で、深夜に及びました。彼らは、改革派の林竹二元学長をよく引き合いに出していました。

学生の主体性を尊重する林先生の考えからか、A類(小学校教員養成課程)は希望するコースに所属できました。しかし、本学は女子学生が定員の約6割を占めます。男子も実験・実習のある理系コースを敬遠して、文系コースに偏ります。当時の学生部長がコースの上限を決めたものの具体策はなく、偏りは1996年の大学改組まで続きました。偏りに応じて予算を増やすなどの措置はなく、卒業論文の指導に大変苦労しました。全集や研究書がなければ、卒論の執筆も指導もできないからです。

国語はA類が40人を越え、B類(中学校課程)が9人程度でした。漢文や書道を希望する学生は少なく、私が担当する近代文学に20人以上集中します。1教員10人までと講座で決め、漢文や書道の教員も近代文学を指導しました。自力で書けそうな学生をそちらに回し、そうでない学生10人を毎年引き受けました。当初は夏目漱石、芥川龍之介、太宰治など卒論に常連の研究書を集めました。毎年いろいろ集め、昨年は遠藤周作や中原中也の全集と研究書を購入しました。そのため、研究費は主に卒論のために使い、加藤豊勲教授(書道)から学生推薦図書費をいただきました。4月から特任教授として8人の卒論を指導します。

## 共に過ごしたキャンパスに ありがとう

理科教育講座 教授

## 玉木 洋一



学生にとって、大学生活の4年間は、勉学は勿論、友人との語らいやサークル活動などを通じてその後の進路が決まる、楽しくも苦しくも一人一人にとって大事な時期であることは確かでしょう。特に4年生の卒業研究では、自分の専門分野に触れ、その発想や手法がその後の人生の血や肉になっている学生をたくさん見てきました。この大事な時間を多くの学生と共有し、38年間共に学び遊んで来たこのキャンパスに今は感謝しています。

昭和40年代後半のドルショックやオイルショックが起こるまで、私は高度成長の真っ直中を過ごしてきました。大学では3年生の学生実験で核反応による元素変換を目の当たりにし、その後の原子核や放射能の研究分野に進むきっかけになりました。文字通り「夢の原子力の時代」を過ごしてきたことになります。その当時でも原子力や放射能について疑問を呈する研究者はたくさんおり、その研究者仲間が全国から集まり泊まり込みで徹夜の議論を行ったこともありました。しかし、一年前、東日本大地震とそれに伴う原発事故が起ってしまった。日常的に放射能を扱っている私にとっては非常にショックであり、これまでの研究分野と社会との私の関わりのなさを痛感しています。今は、限りはありますが私にできることをしようと行動しています。

## Michael Kevin O' Doherty MacManus....."Mac"!

英語教育講座 外国人教師

### マイケル マクマナス



My "Campus Life" was not only spent teaching and taking part in extra-curricular activities....I also lived here! Yes, for 28 years my address was 外国人宿舎 which was located inside the campus. My daily commute to work was about one minute and I never had to worry about traffic jams or nosey neighbours! I enjoyed the beauty of the four seasons from my living-room windows, woke up with the birds and went to sleep to the sound of racoon dogs. It was a very atypical Japanese urban existence.

I consider myself extremely fortunate to have had such wonderful facilities on my doorstep: a running track, tennis courts, a gym, a 50m pool and a 'dojo'. I used them with teachers and students from different clubs or by myself and, in addition, I spent quite a lot of time in the university's lodge in Sumikawa, Zao. When I arrived here in 1979 I expressed my interest in skiing and was quickly welcomed into the "保健体育 family". Under the instruction of different professors I was able to progress to the point where I could pass on those skills to the students. Not satisfied with just skiing, I took up snowboarding and eventually was able to have my own group of 'boarders' in 冬山を滑る会. In summer we went sailing and swimming in Shizugawa and Matsushima and throughout the year we played tennis here on campus on Saturday afternoons, early mornings or at lunchtime.

My greatest connection was with the English Major students who invited me to quite a few parties every year, including my own birthday party. On that day I reflected on how lucky I was to celebrate my birthday with approximately 30 people every year, present and past students, and to receive wonderful presents from them.

My other connection was with the students from the swimming club. With them I travelled all over Tohoku to attend competitions, they as competitors and me as supporter. We practised together in various indoor pools in Sendai as well as our own pool in the warmer months. I always felt proud when people in those pools would ask me how many 'new faces' we had that year or what the results had been, but my proudest moments were when we swam together as a relay team.

None of this would have been possible without the support and assistance of many people to whom I will always be indebted: the administration and academic staff of MUE and of course the students. Being a foreigner can be difficult but I was made to feel welcome by so many people and I would like to take this opportunity to say "Thank You" to all of them.

## 宮教大の発展を期して

特別支援教育講座 教授 青木 成美



「あおばわかば」の原稿依頼を忘れていたある日、原稿の催促依頼が来ました。

提出期限を過ぎているとのことで「さて何を書こうかな?」と思い昨年度退職された先生方の掲載された記事を見ていたら、昨年度退職された数見先生が昭和46年度に赴任されたとの記事が目にとまりました。私が初めて宮教大を訪ねてきたのも同じ昭和46年の夏だったように思います。これが宮教大との関わり合いの最初だったようです。その当時、大学院で視覚障害の勉強をしていた学生の私は、視覚障害教育の第一線の研究者であられた田中農夫男先生に研究についていろいろと助言して頂くためにお訪ねしたのです。

その後、学会等でお会いしいろいろ助言を頂きましたが、平成8年に田中先生の宮教大退職の後任に赴任することになったのも偶然と言うよりは一つの運命だったのかも知れません。この約40年間で宮教大は何が変わったか。バスの運行本数が格段に増えた、建物も立派になった、学生数・教員数が増えた。これは宮教大が確実に発展してきた証拠ですよ。

## 退任される事務職員の方

研究・連携推進課 主任 目々澤 紀子



1970年(昭和45年)3月10日、社会人第一歩のそれから(入試業務の真っ最中の教務課教務係配属、暫く帰宅が10時を過ぎる日が続く)の印象と、当時何も分からずに言われるまま動き回っていたことが懐かしく思い出されます。

早いもので、あれから42年が過ぎました。その後、「附属理科教育研究施設」、「環境教育実践研究センター」勤務を経て、現在、「研究・連携推進課」スタッフとして、本学ではじめての国際環境教育シンポジウムの開催補助、タイ・オーストラリアへの海外出張等を経験し、そして、国連大学からESD活動の地域拠点として世界で最初に認定された「RCE仙台広域圏」事務局として、宮城県内の地域の方たちとの連携事業など、大学人として様々なことを経験することが出来ました。

また、個人的なことになりますが、本学で主人と出会い、自然環境に恵まれた青葉山職員宿舎での3人の子育て等々、私の人生の大半は宮城教育大学とともにあったように思います。

この度、無事定年を迎えることになりましたが、これまでご指導いただきました皆様への感謝と宮城教育大学の更なる発展を祈念いたしましてご挨拶とさせていただきます。

長い間有難うございました。



## Campus Life



佐藤

佑樹

(左) (右)

◇宮城教育大学  
初等教育教員養成課程  
国語コース4年



渡部

明希

(わたのべ あき)

◇宮城教育大学  
初等教育教員養成課程  
体育・健康コース4年



大学4年間で振り返ると、日々の授業をはじめ、4回にわたる教育実習、ソフトボール部での活動、海外総合演習、ボランティアとパワフルでも濃い大学生活を送ることが出来ました。

中でも、ソフトボール部での活動は、ソフトボールが出来る幸せを再確認した4年間でありました。ソフトボールを始めて10年、初めて人数不足で試合が出来ない状況にぶつかりました。その中でも野球部などの協力もあって、諦めずに新入部員が入るのを待ち続け、今の2年生のおかげで再び試合に出ることが出来ました。その時の嬉しさといったら

# 私たち卒業します！

大学4年間で本当によくのことを学んだ。そして、数えきれないくらいの人と出会った。これからも一緒にいたいと思える仲間と出会えたことが、宮城教育大学で得たものの中で何より大きなものだと思ふ。

大学では、国語コースに所属し、Team Artist、空手を経験した。友達はみんないいやつで、(中には変な友達もいたが、受け入れた)みんなすごいと思える何かを持っていた。自分の非力さと比べることもあったけれど、同時に自分らしさみたいなものも見えてきた気がする。大切なのは気の持ちよう。悩んでいる時間は無駄じゃないし、むしろその

。その時、自分がどれだけソフトが好きなのか、皆とソフトをすることが楽しいのかを再確認しました。

また、私は大学生活の中でこれだけは譲れない！というものがありません。それは、当たり前前の事ですが、とにかく毎日学校に行くという目標です。幼稚園の年長から現在まで17年間皆勤賞で過ごしてきた私にとって、ここまでできた何となくでも貫こうと決めていました。17年という長い年月も毎日毎日の小さな積み重ねと、周りの支えがあったからこそ出来た事だと思っています。特に、大学4年間で、本当に沢山の仲間と恵まれたから楽しく過ごせた毎日でした。



きに成長するんだって学ぶことができた。

「何かの講義で「自己有用感」という概念を勉強した。私がこれから教師になるにあたって一番大切にしたいのが、子どものこの感覚である。何でもそうだが、先生にほめられたとき、クラスのみんなに認められていると感じたとき、

この4年間で仲間とのつながりが私にとって、最高の宝物になりました。

最後になりましたが、4年間を通して丁寧にご指導して下さいました先生方、いつも支えてくれた沢山の友達、先輩、後輩には感謝してもしきれません。本当にありがとうございました。春からは、体力と根性を武器に明るく希望を持って生きていきたいです。



「できたー！」と思えたときには本当に嬉しくなる。この気持ちを自分が忘れることなく、これから子どもたちを本気で幸せにしていきたいと思ふ。

卒業を迎えるが、またみんなに会えると思ふ。何か月ぶりになっても、何年ぶりになっても、お互いの成長した姿を見せびらかしに飲みに行こう。辛いことをともに乗り越え、楽しいときをともに笑った仲間と、これからも支え合っていきたい。

最後に、この4年間で関わってくださった仲間、先輩、先生、全ての方に深く感謝の言葉を伝えます。ありがとうございました。



## 佐藤 正和

◇宮城教育大学  
中等教育教員養成課程  
技術教育専攻 4年

(おんがく) まるかず

長いようで本当にあつという間の4年間でした。1年生のころは、専門科目の講義や通学など、大学生活に慣れるまでが大変で、毎日へとへとになっていました。学年が上がるにつれて、授業は少なくなったものの、サークル活動や教育実習、卒業研究やら、忙しくも充実していたような気がします。その中でも、吹奏楽部の一員として4年間過ごしてきた時間は、大学生活の大部分を占めています。楽器はそんなに吹けるわけではないのですが、活動を通して色々な経験をすることができました。



演奏会を通じて、小学生から社会人まで、様々な年齢の人たちと交流することができました。大学生は、学生以外の人と接する機会が案外少ないので、自分の視野を広げることができたと思います。

二つめは、自分たちが演奏をしてお客さんに喜んでもらえたときの充実感を、改めて味わえたことです。昨年の11月に行われた定期演奏会では、久しぶりにお客さんに喜んでもらえる演奏ができましたし、自分史上初のソ



先生方、技専・情もの仲間たち、教務課、学生課の方々、出会ったすべてのみなさん、本当にありがとうございました。最後になりましたが、お世話になった口も担当させてもらい、思い出に残るものになりました。大学生活で経験したこと、人とのつながりは、自分にとって掛替えのない財産になりました。これからも人との出会いを大事にしていきたいです。

## MESSAGE from GRADUATE

# 私たち卒業します！

◇宮城教育大学大学院  
専門職学位課程  
高度教職実践専攻 2年

## 板垣 智佳

(いたがき) ちか



教職大学院には、私のような学部卒業生だけでなく、多くの現職教員の先生方が在籍しています。年齢や校種の異なる先生方と一緒に学ぶことができた2年間はとても充実した日々でした。

講義では、学校教育現場における複雑化・多様化する諸問題についてのどのように取り組むか、といった課題が多く出されました。私はこの課題にとっても悩まされました。手立てについて考える以前に、具体的にどのような問題があり、実際に子どもたちが何に困っているのか、学校現場の実態が明確ではなかったからです。数回の実習経験しかない私に

は難しすぎる課題でした。このときアドバイスをくださったのが、同期であり先輩でもある先生方です。講義だけでなく普段の何気ない会話の中でも、様々な視点から学習指導や生徒指導、学級経営について教えていただきました。その中で、教師になったときに自分だったらどう実践しているのか、常に将来を見据えて考えることができました。

を与えてくださった多くの方々に感謝の言葉を伝えたいと思います。ありがとうございます。これまで学んだことを4月からの職務に生かすことで、恩返しをしていきたいと思っています。



## 介護等体験を終えて

中等教育教員養成課程  
家庭科教育専攻 2年

吉澤 未来 (よしざわ みく)

2日間で色々なことを経験し、本当にたくさんの方のことを学ぶことができました。まず、1日目の朝に、生徒たちの登校の様子を見学し、その時の生徒の挨拶がとても素晴らしく、印象的でした。生徒たちは、バスを降りたら私たちの目を見て、頭をしっかりと下げ、「おはようございます。」と大きな声で挨拶をしていくのです。そのような挨拶は、大人でもできない人はたくさんいると思います。附属特別支援学校では、朝だけでなく校内ですれ違った時も、ほとんどの生徒が素晴らしい挨拶をしていました。また、今まで障害児教育については1年時に講義を受けただけであり、実際の現場ではどのような活動をしているのかほとんど知らなかったのが、実際に授業を見学して新たにわかったことがたくさんありました。作業学習では、物を作り上げる過程を学ぶことを通して、働く為の基本となる、挨拶の仕方や、人の話を聞く態度を学ぶ場であると聞きました。朝の挨拶の素晴らしさは、この作業学習に関わっているのだろうと感じました。作業学習では、一人ひとりが自分の作業を責任を持って行っていました。自分の仕事を黙々とこなしていると思えば、友達に声をかけたり、手伝ったりしている生徒もいて、みんなの団結力を感じました。社会人になる上で、とても大事なことを学んでいるということがよく分かりました。正直、たった2日間の体験で何を学べるのだろうと思っていました。しかし、初日の朝だけですでに多く考えることができ、2日間終わった今では、数えきれないほどの、勉強になることや考えることで溢れています。この2日間での反省や、学んだことを生かし、教育実習や2回目の介護等体験に活かしていきたいと思っています。

## 小学校3年次実習を終えて

初等教育教員養成課程  
数学コース 3年

味水 佳織 (あじみ かおり)

「小学校の教員になりたい」小さいころから、そう夢見てきた私は、念願であった教壇に立つことができると、今回の実習を心待ちにしていました。しかし、いざ実習が始まると、担当になった一年生の子どもたちを前に、悪戦苦闘の日々でした。

私がまず感じたのは、子どもたちを1つにまとめることの難しさです。大きい声を出しても子どもたちを集中させることができず、どうすればいいのかわかりませんでした。そこで子どもたちの意識をパッとひきつけることができる指導教諭の先生の姿を見て、普段からメリハリをつけて接することが大切であると学びました。また、知識を教えるだけではなく生活の基本的な指導をすることも教員の大切な役割であると感じました。

実際に授業をする中で、1年生の発達段階に応じた展開をすることの難しさや重要性を感じました。子どもたちの反応は本当に素直で、私の抽象的な発問で混乱していることがすぐにわかりました。教材研究、考えの取り上げ方、言葉の選択ひとつにおいても、満足のいく授業をすることができず、悔しい気持ちでいっぱいでした。しかし、一生懸命返そうとしてくれる子どもたちを見て、「教員になって、よりよい授業をしよう」という気持ちがより一層強くなりました。

この実習では「教員も学びつづける」という言葉を実感することができました。実習を通して感じたこと、悔しかった気持ちを決して忘れず、今回学んだたくさんの方のことを応用実習、将来の糧にし、進んでいきたいと思っています。



## 中学校4年次実習を終えて

中等教育教員養成課程  
家庭科教育専攻 4年

渡部 渚 (わたなべ なぎさ)

私が教育実習で学んだ様々な事柄の中で、一番大きな収穫となったのは「先生」という職業を3年次実習よりもより実践的に体験できたことです。今回お世話になった中学校では3週間の中に、全学年で行われる定期テストや3年生が対象の実力テストや文化祭、企業訪問など沢山の学校行事が行われました。それらの行事と並行して通常の授業も行わなければなりません。授業案の見直しや立ち回りなど、授業を重ねれば重ねるほどに新たな問題が山積していきます。また生徒と触れ合う時間も3年次実習とは比べ物にならないくらい増え、授業中だけではなく休み時間や放課後には、自分が担当している学年はもちろん、担当以外の生徒とも関わる場面も増えました。自分の言葉が彼らにいくらかの影響を与えるかもしれない…そう考えると一挙一動の細部にまで感じたことのない重みを感じました。私は「生徒は教育実習生を先生と呼ぶ」、事前指導の際に何度も聞いていたこの言葉の意味を痛感してがんじがらめになってしまいました。そんな時に担当の先生から「教育実習は先生の練習をする場、いろんな練習法を試して下さい。」と言葉をかけて頂きました。この言葉のおかげで余分な力が抜けて多角的に物事を捉えることができました。

私は3週間という短い期間の中で普段の大学の授業では学べない多くのことを学ぶことができました。月並みの表現になりますが、この経験はただ講義を受けているだけでは決して体験できるものではありません。これまで「生徒」でしかなかった私たちがいきなり「先生」にならなくてはならず、誰もが抱える大きな不安を払拭するには何よりもまず、「行動を起こすこと」が必要でした。これから教育実習を控えている後輩たちには是非失敗を恐れない勇気と柔軟な心と言葉を忘れないでいてほしいと思います。



## サッカー同好会

サッカー同好会は私が入ったときには部員が10名くらいの小さなサークルでしたが、今や総勢50名を超える大きなサークルになりました。しかし「サッカーを楽しむ」というコンセプトは前からずっと変わらず、人数が増えた今でも先輩後輩関係なく、皆が仲良く活動しています。

人数が増えたことで、2年前からは新日本スポーツ協会のリーグ戦にも参加することができるようになりました。そこで昨年度はリーグ戦の宮城県代表として千葉県で行われた東日本大会にも出場し、準優勝という結果も残すことができました。

個性的でおもしろい仲間達と大好きなサッカーを楽しめる。サッカー同好会はそんなサークルなのです。



菅原 優斗(すがわら ゆうと)

## マンドリン部



私たちマンドリン部は、現在部員11名で週3回活動をしています。少ない人数ではありますが、その分アットホームな雰囲気学部員同士、仲の良い部活です。

マンドリンというとあまり有名ではなく、マンドリンが楽器であることを知らない人も少なくありません。イチジクを半分に割ったような形をしていて、それに弦を張った楽器、このような説明でも実際に見たことのない人にはまったく想像のつかないものだと思います。多くの人にマンドリン、そしてマンドリンが奏でる音の素晴らしさを知ってもらおうと、定期演奏会をはじめ東北学院大学とのジョイントコンサート、また出張演奏といった活動を行なっています。

さらに日々の練習、演奏会以外にも花見や芋煮といった行事で部員の親交を深めています。このように楽しく活動しているのでは非一度部室をのぞいてみてください。

井上 敬士郎(いのうえ けいしろう)

## 卓球部

私たち卓球部は、部員10名と少人数ではありますが、週4日表現棟いっばいに「ファイトファイト～」という大きな声を響かせ、リーグ昇格という1つの目標に向け、部活全体でのまとまりを意識し、練習に励んでいます。

今年度は人数が少ないために、リーグにオープンでの出場になってしまったこともあり、とても悔しい思いをしてきました。今もまた、人数が足りず来年度のリーグに出場できるかどうかという不安を抱えている状態です。その中でも、卓球を楽しむこと、卓球ができることへの感謝のこころを忘れず、部員同士が高め合いながら活動しています。来年度のリーグへ向け、まずは部員を!!ということで、H24年度の新入生勧誘は例年よりも2倍も3倍も力を入れ、臨みたいと思っています。

既に在学中の方の入部も大歓迎ですので、ぜひ興味のある方は表現棟1階までお越しください。個性豊かな部員が笑顔で待っています。



菅原 靖子(すがわら やすこ)

## 体育系サークルリーダー研修会

サークルリーダー研修会実行委員長 石岡 祐未(いしおか ゆみ)

体育系サークルリーダー研修会は、各体育系サークルでリーダーを務めた者、今幹部の立場にある者、今後サークルを担うであろう者が集まり、部活内での縦のつながりだけでなく、ほかのサークルとの横のつながりを作り、宮教大の体育会をよりよいものにしていくという体育会の伝統行事です。今年のリーダー研修会は33回目を迎え、平成23年12月17、18日に国立花山青少年自然の家で行い、約80名の学生が参加しました。

実際に行ったのは阿部副学長による講演会、討論会、レクリエーションなどです。討論会では話し合う内容もそれぞれの班で決めてもらいますが、どの班もとても熱心に話し合っていて、実りある討論会になったのではないかと感じました。レクリエーションでは今まで話したことのない人も含め、班で楽しそうにウォークラリーをしている姿や企画に取り組んでいる姿があり、多くの人が横のつながりも増えたはずですよ。

今回参加して下さったみなさんのおかげで充実した2日間になりました。体育会に属している方にはぜひ、リーダー研修会に参加することをお勧めします。熱く語れる仲間が増えますよ。



## 平成23年度「第19回留学生日本語スピーチコンテスト」

毎年留学生の日本語学習の成果発表のため、そして、日本人学生の多文化理解を促進するために、留学生日本語スピーチコンテストを開催しています。本年も11月29日(火)に、230番教室において、第19回留学生日本語スピーチコンテストが開催されました。今回は、参加者8名参加国5カ国と、たくさんの方の参加者に恵まれ、バラエティに富んだ発表で、充実した時間を過ごすことができました。

話者全員が、入念に準備した原稿を表情豊かに、ユーモアや、時にはパワーポイントを交え発表を行い、甲乙の付けがたい素晴らしいスピーチが行われました。その結果、東北師範大学(中国)からの交換留学生の張小立さんが「視点優秀賞」、社会科教育専修1年(内モンゴル)のシリンさんが「表現力優秀賞」、中国からの研究生の常楠さんが「ユーモア優秀賞」を獲得しました。そして、「最優秀賞」を獲得したのは、10月から留学を始め、一月間で感じた日中の共通点・相違点を通じて相互理解の重要性を訴えた、東北師範大学(中国)からの交換留学生、王春芸さんでした。



このほか、教員研修留学生(モンゴル)のドウゲル・バトドルゾドさん、東北師範大学(中国)からの交換留学生の呉芝蓉さん、教員研修留学生(インド)のジャダフ・パンカジ・ラックスマンさん、教員研修留学生(ガーナ)のビリンボン・ヤー! チュマシワさんが参加し、思い思いに熱弁をふるいました。最後には参加者全員に賞状と記念品が贈呈され、記念撮影を行いました。全員の顔に心地よい疲労感



と、何より充実感・達成感が漂っていました。また、来場者数は100名を越え、非常に活気に満ちた雰囲気で行われたのも特筆すべき点です。留学生のスピーチを聞くと、日本や日本文化の魅力に新しい視点から気付かされます。また、留学生が頑張っている様子を見たり、励んでいる様子を見ると、もっとという気持ちになります。その意味でスピーチコンテストは、会場にいる日本人学生にとっても、たいへん刺激的なイベントになっています。最後に、司会を始め、運営に携わっていたいただいたスタッフの皆様へ感謝申し上げます。

### 平成23年度「留学生を囲む会」

(国際理解教育研究センター 市瀬智紀)

12月13日(火)管理棟3階中会議室において、平成23年度留学生を囲む会が催されました。出席者は、留学生と日本人学生60名、学長、副学長以下教職員、来賓の方々あわせて10数名が出席しました。この会は、本学に留学している外国人留学生を招待し、チューター、姉妹校への派遣予定学生、姉妹校からの帰国学生等の日本人学生や教職員との相互理解と親睦を深めるために、毎年行われて



います。今年度は管理棟3階中会議室の会場に料理がきれいに配膳されていました。高橋亜紀子先生の司会で17時30分より開会しました。最初に、高橋学長の挨拶があり、続いて、島森学務担当副学長の日本の忘年会についての口上の後、乾杯のご発声と同時に、賑やかな歓談が始まり、しばらく料理をほおぼりながら、楽しい時間を過ごしました。

その後恒例のビンゴゲームが行われ、皆、時間を忘れて盛り上がっていました。プレゼントの包みを開け、お互いに品物を見せ合っていました。特にインドからの留学生パンカジさんがサントアを持って登場した時盛り上がりはピークに達していました。終始笑い声の絶えない時間はあっという間に過ぎ、19時30分にお開きとなりました。23年度も、本学との交換留学の姉妹校である東北師範の留学生をはじめ、教員研修留学生など多くの外国からの学生が、日本人の学生や教職員と交流を深めることができました。今年度の会を開催するにあたり、ご尽力下さった皆様に感謝申し上げます。

(英語教育講座 鈴木 渉)



サンタさんも良い気分です



次のビンゴは...

### 留学希望者向け広報ビデオ「宮城教育大学へおいでよ!」を制作しました。

東日本大震災後、地震や原発への不安から、日本国内で学ぶ留学生は、平成23年度5月時点で、前年度より約3700人、26%減少しました(JASSO調べ)。本学でも、震災以前に在籍していた留学生は戻ってきてくれましたが、新規の留学生は、前期3名、後期4名で、例年に比べて大幅に減っており、危機的な状況にあります。そこで、広報戦略室では、仙台が放射線量からみても安全であること、震災の影響を気にせず、安心して勉強ができることをアピールする広報ビデオを制作しました。英語・中国語・韓国語の3か国語に対応しています。出演者はリス・エイドリアン英語講師、ジャダフ・パンカジ・ジャダワさん(インド)、常楠さん(中国)の3名ですが、その他にも学生や教職員の皆さんにもご協力をいただきました。玉木洋一先生には、放射線量を示す資料の監修をお願いいたしました。ご協力くださった皆様、ありがとうございました。ぜひ、こちらをご覧ください。 <http://www.miyakiyo-u.ac.jp/international/ct2.html> (広報戦略室 高橋亜紀子)





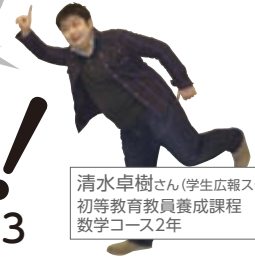
I want to know about these things.

学生広報スタッフの

# ココが知りたい!

Vol.3

キャリアサポートセンター  
について調べて  
きました!



清水卓樹さん(学生広報スタッフ)  
初等教育教員養成課程  
数学コース2年

## キャリアサポートセンター長 阿部 芳吉副学長にお話を聞きました!

### Q キャリアサポートセンターの特色は何ですか?

**A** キャリアサポートセンターは学生の将来を考えて相談にのってくれるところです。進路を考える上でベテランの先生が教えてくれます。多くの分野の進路に対して資料をくれたり、アドバイスを受けたりできますね。そして、和やかな雰囲気です。教師になりたい学生には、作文やピアノ、面接指導、そして勉強会を行い、対策がたくさんあります。学生の皆さんには2号館の掲示板の貼り紙を見てほしいと思います。  
次にボランティア活動に積極的な点です。現場からの様々な要望に対し、それに応じて学生に募集し、派遣しています。



求人票の閲覧



各種問題集等の閲覧



面接指導



ピアノ実技指導

### Q どんなときにキャリアサポートセンターを利用すると良いのでしょうか?

**A** 教採の前や就活の時だけでなく、ボランティアをしたい時も利用すると良いでしょう。また教採後も万全の対策を作っていますので、利用する機会はたくさんあります。4年間の学生生活をどう過ごすかについて一緒に考えていきますよ。

### Q いつ頃から行くのがベストですか?

**A** 気がついたらいつでも来てください!でも3年生までに来ることをオススメします。

### Q 宮教大の学生にメッセージをお願いいたします。

**A** 宮教大にはいろんな可能性をもった学生がいっぱいいます。ぜひ、部活動やボランティアで自分自身を磨いてください。そして、学生生活を楽しんでください。学生のときにしかできないことがたくさんあります。熱中してやってください。



## キャリアサポートセンターを利用する学生に取材してきました!

初等教育教員養成課程 数学コース2年 芳賀 雄大さん



### Q センターを初めて利用したときどうでしたか?

**A** 緊張しながら入りました。すると、あいさつが飛び交う雰囲気のでびっくりしました。どうしましたかと声をかけられ自分から話しかけづらいと考えていた僕でも話ができ、教師に関する興味、知識を深く知ることができてまた行こうと思いました。

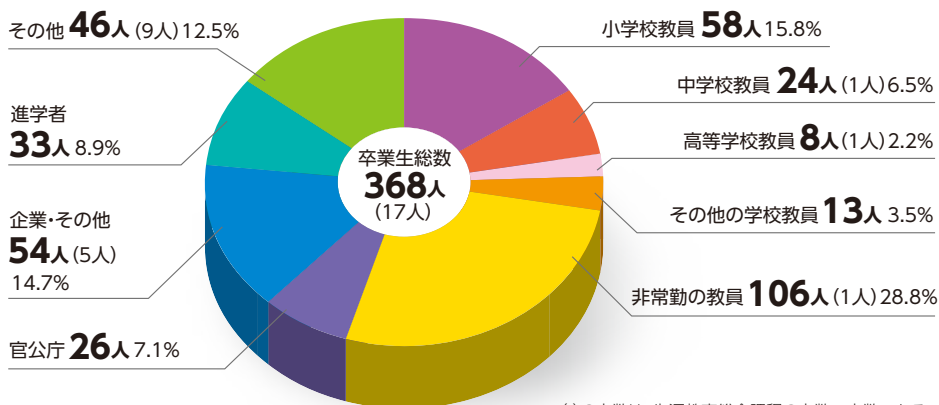
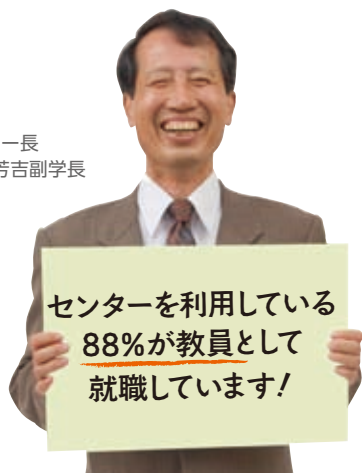
### Q どんな感想をもちましたか?

**A** 合格体験記などを見せていただき、先輩もやはりキャリアサポートセンターを利用することで、学ぶことがたくさんあったんだなあと思いました。なにより、入ったときに何の抵抗もない空間が好きです。  
自分の将来について、いま思っている考えなどに共感してくれたり、親身に聞いてくださり、来て良かったなあ毎回思います。もっとみんなに知っていただきたいと思うばかりです。

## 卒業生の就職状況

(平成22年度)

センター長  
阿部 芳吉副学長



※( )の人数は、生涯教育総合課程の人数で内数である。

### 【平成23年度 キャリアサポートセンターの就職活動支援について】

4月中に4年生を対象とした勉強会を実施。各都県市の教育委員会を主体とした、教採試験説明会も行いました。また、就職活動支援として、これまでの面接指導およびエントリーシート添削に加え、新卒応援ハローワークによる出張個別就職相談を行いました。

## ボランティアサポートルーム

平成19年4月よりボランティアサポートルームを併設しました。3.11の震災以降も、センターからボランティアとして多くの学生を輩出してきました。現在も「学生サポートスタッフ(仙台市教育委員会)」や「学府くりはら塾(栗原市教育委員会)」など、教育委員会と連携して、学習活動の指導補助や特別活動におけるお手伝いなどのボランティア事業への学生派遣に取り組んでいます。

### キャリアサポートセンター ボランティアサポートルーム

Tel 022-214-3338 / 022-214-3596  
Email syusyoku@adm.miyakyo-u.ac.jp

宮教生のみなさん、  
キャリアサポートセンターに行って  
実際利用しよう!!

詳しい内容はセンターから発行している  
「キャリアサポートセンターだより」に  
掲載されているので読んでみてください!!



宮教大の多彩な  
研究の「いま」を  
所属学生がレポート!

## 「食」の可能性を広げる

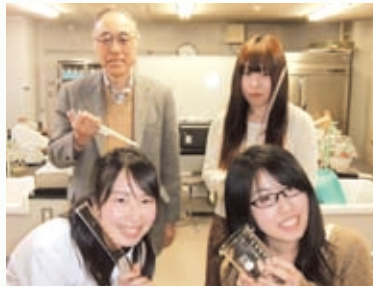
鎌田研究室

鎌田 慶朗 (かまた よしろう)  
家庭科教育講座 教授

鎌田研究室、通称「かまけん」では、食品科学を中心として研究しています。特に、食品タンパク質の特性変化に着目し、通電することによって様々な食品の特性を変えてきました。今まで、豆類、穀類タンパク質の加工特性、新規な加工法の開発について明らかにしてきました。現在、福島原発の事故を受けて、セシウムの除去に関する研究もしています。電極を土壌に差し込んで、表土をはぎ取らずに除染する試みです。鎌田先生は宮教歴23年のベテランの先生です。

現在、鎌田研究室には、学部生が8人所属しています。私たちは、鎌田先生の指導の元、それぞれの研究を進めてきました。私たちの研究では、米粉の通電加工についての研究などを行っています。普通の米粉パンには小麦グルテンが添加されていることが多いのですが、小麦グルテンなしにおいしい米粉パンを焼く研究をしています。また、土壌や食品からセシウムを除去する研究を始めました。これらを社会で活用させるた

め、日々研究を進めています。生きていく上で欠かすことのできない「食」の可能性を広げる、それが鎌田研究室なのです。  
(家庭科教育専攻・コース4年 五十嵐莉那、加藤沙樹、黒須ちひろ)



## より良い英語の授業づくりを目指して

亀倉研究室

亀倉 靖宏 (かめくら やすひろ)  
教職大学院 准教授

私たちが通う教職大学院では、研究内容ごとに「ユニット」と呼ばれる班に所属し、メインの先生(ユニット長)や他の先生の下で研究に励みます。学校現場経験の豊富な教授陣と、院生である現職教員に囲まれながら学修できるため、これから教育現場に足を踏み入れる私の様なストレート・マスターには、毎日が新発見の連続です。実践研究(教育実習)を始め、公開研究会等で実際に学校現場を訪れる機会がとて多いカリキュラムなので、大変良い学びができています。私たちの研究室では、亀倉 靖宏准教授の下で、自分の追求するテーマに沿って研究を進めています。週に一度、一対一でのゼミを行い、研究について確認したり、アドバイスを頂いています。ですがそれだけではなく、私たちの研究室は皆専門教科が英語であるため、家庭でも毎日英語を学習させるにはどうしたら良いか、より良い学習集団のためには等、より良い授業の在り方を研究テーマに絡めながら考え続けています。現場経験のない私たちにとって、亀倉先生から一対一

で英語科の授業について教えていただけるこの研究室は、かなり贅沢なのではないかと思えます。受験教科としての英語、テストで点数をとるための英語ではなく、コミュニケーションを図る生き生きとした言語としての英語を生徒に実感させ、「もっと話したい、伝えたい」と思ってもらいたい。そして、「英語が分かる、できる」達成感を多くの生徒に味わってもらいたい。そんな授業を行うため、研究を重めています。  
(教職大学院 学級・学校経営 班2年 佐藤歩弓)





## はじめまして、佐藤哲也研究室です！

佐藤研究室

佐藤 哲也 (さとう てつや)  
幼児教育講座 准教授

佐藤哲也先生は、昨年3月、関西の教員養成大学から宮城教育大学幼児教育コースに赴任されました。以前、仙台には新婚旅行や学会でいらしたことがあったそうです。

哲也先生の研究室は、6号館4階にあります。研究室には幼児教育のみならず、歴史、哲学、社会学、人類学など、幅広い分野にわたる和書や洋書、論文がたくさん所蔵されています。哲也先生の専門は幼児教育学です。特に近代幼児教育思想の研究に取り組みられています。数々の文献や資料に裏付けられた知識に基づいて、幼児教育の歴史や思想、子育ての習俗等について、非常にわかりやすく興味を湧く講義をして下さいます。また、哲也先生は幼稚園や保育所などの実践現場にも頻りに足を運ばれています。幼児の遊びや生活、保育者による援助、園内環境を収録したビデオや画像、哲也先生の体験などを織り交ぜて、保育の実践理論や技術についても、手ほどきしていただいています。震災、教育実習、採用試験等、非常に慌ただしい1年間でしたが、楽しく学びながら、保育者になるための力量を磨くことが出来ました。

佐藤研究室では文献研究が基本になります。学生が取り組む研究内容は様々です。



今年の卒研は、児童虐待の言説分析、保育援助理論としてのコーチング、命を学ぶ保育教材としての絵本、幼児の笑い、子どもの日常的音楽表現など、学生一人一人の興味関心に応じて研究テーマは多岐に渡りました。哲也先生のご指導を受けながら、たくさん文献や論文を読み、保育現場にも足を運んで観察記録・省察を積み重ねてきました。それぞれが研究を深め、卒業論文をまとめることができました。研究室で学んだことは、保育者としての実践を支える基盤、自ら考えて保育に取り組みするための羅針盤になると確信しています。

幼児教育についての深い知識や新たな視点を得ることができ、それが佐藤哲也研究室です。

(幼児教育コース4年 伊藤詩織、梧桐奈津美)

## 音楽教育学にハマる

小畑研究室

小畑 千尋 (おばた ちひろ)  
音楽教育講座 准教授

**Q:**ゼミはどんな雰囲気ですか？  
**A:**ゼミは、先生のパソコンが置いてある大きな机を囲んで行われています。先生からご指導をいただくだけでなく、かなり活発な意見が飛び交い、議論が白熱して時間が延長することもしばしばです。そして時には、紅茶を飲みながらゼミから女子会に変わるのも、楽しい展開です。

**Q:**小畑先生はどんな先生ですか？  
**A:**小畑先生は明るい笑顔が印象的な、何事も熱心にご指導してくださる先生です。授業は音楽科教育の授業を中心に担当されています。また先生のライフワークとして、「音痴」克服の指導に関する研究をされています。

**Q:**小畑研究室でどんなことを学んでいるのですか？  
**A:**音楽教育学について学んでいます。学校での音楽教育はもちろんのこと、家庭・保育における音楽教育、成人を対象とした生涯学習としての音楽教育など幅広く、私たちも興味を尽きません。これらを学びながら、ゼミでのディスカッションを通して自分自身の興味あるテーマを絞り、研究を進めていきます。



**Q:**お一人は、今日まさに卒業を提出されましたね？  
**A:**伊藤：はい。私は被災地の教員養成大学で学ぶ者として何ができるのか、ゼミでかなり検討を重ねて「被災者支援のための音楽活動に関する研究」をテーマにしました。論文を書き上げることは想像を越える大変さでしたが、だからこそ、言葉に言い尽くせぬ達成感を感じています。

加藤：私の卒業論の題目は「イギリスにおける音楽科教育の実態」です。来年度から小学校教員として働くということもあり、海外の学校教育について研究することは、私自身の学校教育に対する考えを深める機会になりました。そして何より、何度も推敲しながら卒業論を書き終えたことで、人間としても大きく成長できたように感じます。

(音楽コース4年 加藤美奈、音楽教育専攻4年 伊藤聡子)



## 角田市・角田市教育委員会と「連携協力に関する覚書」取り交わし

平成24年2月16日(木) 本学は角田市・角田市教育委員会と「連携協力に関する覚書」の取り交わしをしました。本学がこのような連携協定の締結を行うのは、角田市・角田市教育委員会で11ヶ所目となりますが、仙南地方では初めてとなります。

本学は、角田市教育委員会が平成23年度に新たに立ち上げた幼児期の教育検討事業への指導・助言を行う等、これまでも支援活動をして参りましたが、これを契機に、今後の連携をより密接にするとともに、角田市内の小中学校の学力向上対策や教職員の研修等においても、相互に連携協力して事業を進めるという点で双方が合意し、この度の締結に至りました。



当日は本学の高橋孝助学長が角田市役所を訪れ、大友喜助角田市長、菊池俊彦角田市教育委員会教育長と覚書に署名、交換を行う他、本学から書棚や書籍の寄贈も行われました。

今後は連携協定に基づき、幼児期の教育の検討、児童生徒の学力向上、教職員の研修等、多岐にわたる分野における教育の調査・研究を継続的に実施するとともに、角田市・宮城教育大学連携支援推進室を設置し、これを拠点として相互に連携を深め、教育の振興を図って参ります。



## 大郷町・大郷町教育委員会と「連携協力に関する覚書」取り交わし

平成24年2月21日(火) 本学は大郷町・大郷町教育委員会と「連携協力に関する覚書」の取り交わしをいたしました。連携協定の締結は大郷町・大郷町教育委員会で12ヶ所目となります。

本学は今年度大郷町にて初めて実施された「大郷町サマースクール・ウインタースクール(学習支援ボランティア)」へ学生を派遣しており、今後はさらに小中一貫教育等へ連携事業の幅を広げたいということから、この度の締結に至りました。



当日は、本学の高橋孝助学長が大郷町役場を訪れ、赤間正幸大郷町長、鹿野毅大郷町教育委員会教育長と覚書に署名、交換を行いました。

今後は、児童・生徒の学力向上、教員の養成・研修、幼児・児童・生徒の学校生活の支援、大学及び学校における教育研究面での協力等、教員の資質能力の向上及び教育上の諸課題への確に対応するため、相互に連携協力して研究・協議を行うとともに、その具体化を図り、その成果を生かして双方の教育の充実・発展に貢献していくことが期待されています。



## 小学生のための音楽鑑賞会「ふれあいオーケストラ」を実施しました

平成23年9月29日(木)、本学と仙台市教育委員会は、子どもたちにオーケストラによる音楽鑑賞を通じて豊かな人間性を養ってもらおうとの趣旨から、小学生のための音楽鑑賞会「ふれあいオーケストラ」を開催しました。

平成16年度から始まったこの事業は8回目を数え、仙台市内21校1,600名の小学生に、教科書に出てくる有名な曲の演奏のほか、教育大学ならではの教育的で多彩なプログラムを実施しました。



演奏の合間には、小学生が実際にオーケストラの指揮者となる体験コーナーを設け、その個性あふれる指揮に会場はおおいに盛り上がりしました。

楽器とのふれあいコーナーでは、団員が実際に小学生に指導しながらバイオリン演奏を体験させたり、楽器の解体モデルを説明するなどして、子どもたちにオーケストラに関する知識を深めてもらうとともに、教員をめざす学生にとっても、音楽を通じて子どもたちとふれあうことのできる貴重な機会となりました。



## 平成23年度「特別支援教育支援員講習会」を実施しました

宮城教育大学と気仙沼市教育委員会では、発達障害を含め様々な障害のある幼児及び児童生徒の理解と支援に関する最新事項の講習を通じ、特別な支援を要する幼児及び児童生徒に対し、担当教諭と協力して必要な支援を行う者の資質向上を図ることを目的として、平成23年11月27日(日)、平成24年2月19日(日)の2日間、特別支援教育支援員講習会を実施し、気仙沼地区や本吉地区の支援員40名が受講しました。

今回は、関口博久教授、猪平眞理教授、菅井裕行教授、野口和人教授による4講座が実施され、規定の講座を受講した支援員には、宮城教育大学より修了証書が渡されました。

昨年度に引き続き今回で2回目となる同講習会は、震災の影響で「気仙沼市教育委員会・宮城教育大学連携センター」が使用できず、会場に気仙沼市立気仙沼中学校及び気仙沼市立新月中学校をお借りした点、昨年度導入した「インターネットテレビ会議システム」を使用した遠隔授業は実施せず、現地で直接講義を行った点など、例年とは違い臨機応変な対応が求められ、様々な方にご協力をいただきました。



講習会後に実施した受講者アンケートからは、「今回学んだ内容・情報を役立てたい」「もっと先生方のお話を聴きたい」「自分が支援している児童への接し方について発見があった」など、今後の継続を求める声が多数寄せられました。

昨年度から始めた事業ではありますが、現場からのニーズが非常に高く、今後の継続的な活動が期待されます。



## 宮城教育大学 PRESENTS ♪「ロビーコンサート in 仙台市天文台 vol.5～vol.7」を実施しました

平成21年7月1日に、教育分野での連携を強化するため仙台市天文台と「連携協力に関する覚書」を取り交わして以来、芸術系の音楽教育専攻の在籍生、卒業生、教員らと天文台がタッグを組み、新たな可能性にチャレンジするという目標のもと、継続して実施されている事業に「ロビーコンサート」があります。

第1回目のコンサートから3年目を迎え、今ではすっかり人気イベントの一つに挙げられるほどになりました。

今年度は、9月10日(土)「Vol.5 星のセレナード」、12月10日(土)「Vol.6 月に寄せる歌」、2月4日(土)「Vol.7



こと座のエチュード」の計3回のコンサートが実施され、本学の学生が天文台をイメージして作曲した曲の初演や、初のプラネタリウム内での演奏が行われる等、話題性に富んだ内容となりました。

「今日はロビーコンサートを聴くために天文台に来たんです。」最近ではこんな声を来場者からもいただけるようになり、市民の皆さまにも着実にこのコンサートが定着してきたように感じられます。来年度以降も本学の新しいチャレンジに期待したいです。



## 栗原市の小学校児童と留学生との国際交流会を実施しました

栗原市教育委員会と本学との連携協力に関する覚書の取り交わし以来、継続して実施している事業に「留学生派遣交流事業」があります。

児童が留学生と接することで、地域の国際化を考えるとともに、地域の将来を担う国際的な視野を持った人材の育成を図る機会とすることを目的としています。



今年度は平成23年11月30日(水)、12月14日(水)の2日間にわたり、インド、モンゴル、中国、ガーナからの留学生が、栗原市立一迫小学校、栗原市立姫松小学校、栗原市立金田小学校、栗原市立長崎小学校を訪問しました。

各国の紹介や簡単なゲーム等の交流を通じて、児童たちは楽しみながら様々な国の言葉や文化の違いを学ぶことができました。また、本学の留学生も児童たちから和太鼓や神楽を披露してもらったり、書写・書道に挑戦してみたり、楽しいひと時となったようでした。



## 「よりよい遊びができるような環境作りを目指して」

附属幼稚園は「好きな遊び」を中心とした保育をしています。子どもたちの思考力や想像力を促すには体を使う直接体験と切り離すことができません。この力は主体的に遊ぶことを通して身に付いていきます。また、遊びの中で友達とかかわることで社会性も身に付いていきます。そのためにも我々教師は、個々の子どもが発達していく姿を様々な面から総合的にとらえて、発達に必要な経験が得られるように環境を構成していきます。

今年度は園庭での環境で、いくつかの変化がありました。まず、夏休みの間にプールの隣に滝ができました。これはリフレッシュ教育の一環で作られたもので、子どもたちが自分の住む地域に生息する身近な生き物や自然に触れ合う機会をもてる目的で作られました。滝の周りは芝生や樹木で囲まれ、プールに行く時には木製の橋が架けられる仕組みになっています。子どもたちはそこで靴を脱いで裸足で入り、流れる水の感触を味わったり、秋には落ち葉を浮かべて葉が流れていく様子を楽しんだりしました。滝は地域に園庭を開放する未就園児園庭開放でも好評で、未就園の幼児たちがお母さんと一緒に水辺で水遊びを楽しむ姿もたくさん見られました。

次にジャングルジムや滑り台などの遊具のペンキを塗り替えたことです。同じ遊具なのに、色が変わるだけで、楽しく見えてくるから不思議です。子どもたちはウキウキした気分で登り棒の一番高いところに登ったり、雲梯にぶら下がり楽しんで遊びました。

今年は放射線の問題もあり、畑でサツマイモを育てる活動ができませんでしたが、お化けカボチャやおもちカボチャを育て、飾ることで収穫の喜びを味わいました。

幼稚園では今後もさまざまな遊びを通して、喜びや楽しさを味わわせ、自ら考えようとする気持ちが育っていくようにしていきたいと考えています。

附属幼稚園 教務主任 秋場 文東

## 附属幼稚園



「気持ちいい」玉砂利を踏みながら行ったり来たり



育てたお化けかぼちゃ「重いよ〜」大きさにびっくり

## 校部から

### 教育実習 の取組



## 「4年生での宿泊学習」

小学校での宿泊学習といえば、一般的には5年生から実施するところが多いと思いますが、附属小学校では、平成12年度から4年生での宿泊学習を取り入れています。(21・22年度は新指導要領移行期間による時数確保のため実施しませんでした。)それは、4・5・6年と3年間積み上げることで、自主性等を高めることを大きなねらいとしているからです。4年生では、その土台づくりの時期として、「自然にふれながら互いを思いやる心や協力して生活しようとする態度を育てる」「集団生活のあり方や公衆道徳等につ

いて望ましい体験を積むとともに、諸活動に進んで取り組むことができるようにする」ことをねらいとしています。

3年ぶりとなる今年度は5月に実施する予定でしたが、震災の影響で泉岳少年自然の家が5月末まで利用できない状況となり、急ぎよ、夏休み直前に実施することになりました。そこで、4年生は子ども先生も暑さに負けない体力づくりのために、本番に向けて一生懸命校庭を走る姿が見られました。

宿泊学習本番の7月15・16日は、30度を超える猛暑となりましたが、走り込みをしていたおかげもあって、登山や七北田川上流探検に全員元気に活動に取り組み、やり遂げることができました。

また、大学との連携としての学生ボランティア(十数名)の協力も大きかったようです。ただ、野外炊飯の後片付けや自分の荷物整理に手間取り、時間がかかってしまったようです。

これらの点は、反省として5年生での活動に生かされていきます。

ここに4年生で野外活動を経験させる意義があるのではないかと考えています。

附属小学校 主幹教諭 小澤 晃



水神付近での調査活動



初めての野外炊飯カレーライス作りに挑戦!

## 附属小学校

# 附属中学校

## 「大学見学会で、一日大学生！」

当校では、2学年の進路学習の一貫として、毎年、宮教大を訪問し、大学の施設見学会や講義を受ける体験をしています。目的は、大学の専門的な講義を受けることによって、自らの学ぶ姿勢を振り返り、将来の進路を考えるきっかけにする場と考えています。当日は、本校よりバスで大学まで行き、その後ガイダンスを受けてから、生徒の興味関心に合った講義を選択して受講します。今年度は、13もの講座が中学生を受け入れてくれました。中には、前校長渡辺善雄先生の「国文学史B」や現幼稚園長應和恵子先生の「声楽基礎」など、附属校園内で身近に接している先生方の講義も受講できました。講義を受けた生徒の感想として、「大学見学会では、自分の将来を考える良い時間になりました。大学生の人達は、先生の話をしているときもメモをとっていて、ほとんど無言でした。実験の時も、先生に言われたことだけではなく、自分たちのグループ内で発見したことを細かい所まで追究していました。ノートの取り方などもとても参考になりました。この体験を生かしていきたいと思います。」などの感想がありました。どの生徒にとっても、貴重な体験になったようです。



各講義の前のガイダンス風景



難しい内容を真剣に受講している様子

大学見学会での「一日大学生」の体験は、時期的にも内容的にも、進路を考える良い機会となっていることがわかります。当校の大学見学会は今から15年位前から始まったものですが、これからも、その時々時代のニーズに対応できる内容に変化させながら、附属中学校の特色ある教育活動のひとつとしていきたいと思っています。

附属中学校 主幹教諭 小松 恵子

From Affiliated Schools

# 附属学



平成23年度  
各校園



## 「2年に一度の大運動会」

特別支援学校では、10月1日(土)に運動会が行われました。本校では、運動会と学芸会を隔年で実施しているため、まさに2年に一度の大きな行事となります。

本校の運動会は、小学部、中学部、高等部の学部ごとの演技に加え、児童生徒が出場種目を選択して参加する「選択種目」、全校で行う「全校リレー」と、さまざまな参加形態で行われます。途中、保護者・卒業生競技、未就学児競技も加わり、約2時間15分に渡る熱い闘いが繰り広げられました。

小学部演技「はらぺこあおむし」は、たまごから幼虫、成虫へと成長していく過程を小学部児童18名が体をいっぱい使って表現しました。最後は巨大な美しい蝶が出現するなど、ファンタジーな内容は見どころ満載でした。

中学部演技「パイレーツ・オブ・クリムゾンレッド・クリフ」では、生徒一人一人がクリムゾンレッドのフラッグを持ちながら、縦横無尽に移動するマス・ゲーム的要素を盛り込んだ演技を披露しました。校庭を目いっぱい使用しての一条乱れぬ動きは感動でした。



中学部演技「パイレーツ・オブ・クリムゾンレッド・クリフ」



高等部演技「スーパーエイサー2011」

高等部演技「スーパーエイサー2011」は、運動会の風物詩ともなっている高等部の伝統的演技です。沖縄の伝統芸能「エイサー」をベースに、構成をリニューアルし、器械体操を取り入れながら迫力ある踊りを展開、圧巻の演技内容に会場から大きな拍手がわき起こりました。

上杉の附属校園からも、たくさんの方々にご来場いただき、ご声援をいただきました。ありがとうございました。

附属特別支援学校 教務主任 佐藤 功一

# 附属特別支援学校



[所属] 財務課 予算係  
[出身地] 山形県山形市  
[趣味] 歩くこと、自転車

**早坂 彩さん**  
(平成20年4月 採用)

所属係のことをお聞かせください。

早坂..所属は財務課予算係です。一番大きな仕事はなんといっても概算要求と学内への予算配分です。毎年、次年度の予算が内示されて、それをもとに学内に予算を配分し、調整していきます。

予算係の面白さや、やりがいを教えてください。

早坂..平成23年度に異動したばかりで、全てが分からないことだらけなので、まだやりがいというところまでは行っていないのですが、その中でも色々な事柄の関係性というか「横のつながり」が見えた時は面白いなあと感じています。

複数の部署を経験している若手がまだ少ないですが、二つの部署を経験して、前職の人事係の経験が生きていると感じたことはありませんか。

早坂..予算の資料を見ている、「人件費」などは人事で勉強した給与の仕組みや手当の種類を考えながら見ることができるのでやりやすさはあります。

早坂さんが感じる「デキル人」とはどのような人だと思えますか。

早坂..ただ単に前例にならうのでは

なくて、同じことをやるにしても自分の考え方を持ちながらやるのは大切なことなのかなと感じています。デキル人って「考える人」なのかなと思います。考えないでやるうとして、いくらでも前例にならうてこなすことはできますが、何かと疑問を持つてみるのが大切ではないでしょうか。

他に、周囲の方と一緒に仕事をするうえで意識していることはありますか。

早坂..今は番下なので、自分の間違いはなるべく指摘してもらえようにして、自分の状況を周りに聞いてもらえようにはしています。

それでは、来年度は仕事にどのような取り組みたいと考えていますか。

早坂..今は何かと受け身なので、来年度は自分から早め早めに行きたいです。あとは、もっと知識を深めて自分が何をやっているかもっと分かるようにしたいです。

最後に、予算係として教職員の皆さんに言えればお願いします。

早坂..先生方には、気になったことがあれば是非それを共有させていただきたいですね。例えば予算配分のことで、先生方の疑問に対して、こちらで説明して初めて納得していただけることもあるかもしれません。

私に話してほしいだけでも、すぐに解決することばかりでは無いと思います。だから、「なんでも聞いてください。いただし、時間をください。」という感じでしょっか(笑)。

※概算要求国の予算の編成(先立ち、政府各官庁が例年8月末までに財務省に提出する次年度の予算要求。

# 宮城教育大学の未来を担う、 若手職員たちを紹介します!

vol.1



[所属] 研究・連携推進課 研究協力係  
[出身地] 秋田県南秋田郡大湯村  
[趣味] 懇親会、スポーツ観戦

**山田 和也さん**  
(平成22年4月 採用)

所属と、ご自身の仕事のことを含めた近況をお聞かせください。

山田..私は現在、研究連携推進課研究協力係に所属しています。最初に担当したのは、科学研究費補助金に関する業務でした。申請から執行、報告まで任されたのですが、二年目は本当にいろいろいっばいでした。それから二年目になり、寄附金の受入、受託事業の申請や収支報告などもやらせていただくようになりました。他には、不正防止ですね。今年年かなり勉強させてもらっています。

覚えることや関わる業務の範囲が広くて大変だなと感じることはありませんか。

山田..個人的には「やればやっただけ勉強になる」と思っています。「その時々でできる範囲しかできません。うー」といった開き直りはありません。大変だと思ったことはないです。もちろん、周りの方々のフォローがあつてのことです。

それでは今の部署で三年目を迎えたとしたら、どのようにして業務に取り組んでいきたいと考えていますか。

山田..二年目については、「色々つま

み食いをさせてもらった」という印象です。三年目はもうちょっと「味」が分かるようになりたいです。色々なことを「やらせてもらっている」という気持ちが大いなので、自分のものにしていききたいなと思っています。

ご自身の今後についてはどう考えていますか。

山田..研究協力業務を経験して、先生方の研究活動が社会に大きな影響を与えるものだということを感じることが出来ました。ですので、多方面で先生方の研究活動を整備していきたいようになりたいです。今後どんな部署に配属されたとしても、この気持ちは持ち続けていきたいです。

大学の将来については、どのような理想をお持ちですか。

山田..卒業生が多方面で活躍して、自分達の知らないところで宮教大の評判が上がっていくのが理想ですね。それから、各地で宮教大と関わってくださった方々に「宮教大ならではの良さ」をもっと感じていただきたいです。本学には、誇れる部分がたくさんありますから。ナンバーワンよりもオンリーワンを目指したいです。「オンリーワン」というのは地域の方々が決めてくださるんじゃないかなと思うんです。震災の時も、「まずは宮教大に連絡をした」という方が大勢いらっしやいました。そんな方々の気持ちに、これからも応えていきたいです。

※科学研究費補助金(学術を振興し、独創的先駆的な研究を奨励することを目的として、人文社会科学から自然科学に至るあらゆる分野を対象に交付される研究助成費。公募制となっており、各研究者が提出する研究計画書に基づき審査が行われる。文部科学省及び独立行政法人日本学術振興会が提供する競争的研究資金のこと。

笑顔カレンダー  
笑顔が生み出す力

「笑顔カレンダー」をみなさん御存じでしょうか。これは、私が所属していた学都連携プロジェクトという宮城県の学生グループが生み出したもので、笑顔の写真で365日のカレンダーを作る、という企画です。



▲参加した宮教生たち

この企画のために宮教大で写真撮影をしているうちに、「宮教大だけの笑顔カレンダーも作ってみたい！」と考えるようになり、私の呼びかけで集まった卒業生

グループが中心となって、「宮教大笑顔カレンダー」を製作しました。昨年は東日本大震災があり、とても苦しい時期でしたが、

そうした時こそ「笑顔」の持つ力で元気を分かち合いたいという思いから、このカレンダーは誕生しました。



▲理科教育専攻 4年 菅原優斗さん

「誰かの笑顔は他の人を笑顔にし、生きる力を生み出してくれる」笑顔カレンダーを見て、1人でも多くの方が笑顔になり、生きる力が生み出されることを、私は願っています。最後に、カレンダー製作にご協力いただいた方々に心より感謝いたします。本当にありがとうございました。

(中等教育教員養成課程 理科教育専攻)

4年 菅原優斗

「復興への子どもたちの時間」  
ヤギと癒しと〜を開催しました。

平成23年11月19日(土)に仙台市の「せんだい演劇工房10・BOX」で、「一般市民を対象とするイベント「復興への子どもたちの時間」ヤギと癒しと〜」が開催されました。イベントのテーマはヤギと子ども。ということで、本学はこのイベントの開催に協力し、ヤギとのふれあいコーナー、対談コーナー、ストーリーペインティング、ゲーム・クイズのコーナー、展示を担当しました。

ゲームとクイズのコーナーでは、文化系サークル「自然フィードワーク研究会YAMOO」の学生が「食いしん坊ヤギさん、いくつ入るかな?」のゲームを考案。単純なゲームの点数に応じてヤギについてのクイズが出題されます。こんなゲームでいいのかなと思うほどのシンプルさがかえって好評でした。

ヤギとのふれあいコーナーには新潟からきているヤギの「ハルちゃん」と「元気くん」が参加しました。

午後から雨が降り出し、あいにくの天気となりましたが、約300名の参加者はヤギと触れ合って、楽しい時間が過ごせたようです。この日の催しにご協力を頂きました皆様感謝します。



▲ふれあいの主役をつとめた元気くん



▲楽しいプログラムは学生が考えました

(環境教育実践研究センター)

齊藤千映美

宮教大の今後の予定

- 入学式: 4月4日(水)
- 新入生オリエンテーション・ガイダンス: 4月4日(水)~6日(金)
- 授業開始: 4月9日(月)
- 新入生宿泊研修: 5月12日(土)、13日(日)
- 東北地区大学総合体育大会: 6月上旬
- 附属学校公開研究会
  - 附属幼稚園: 6月7日(木)
  - 附属小学校: 6月8日(金)
  - 附属中学校: 5月25日(金)
  - 附属特別支援学校: 6月1日(金)

編 | 集 | 後 | 記 |

清水: 「あおばわかば 25号」を作成するにあたってのどのような思いがありましたか?

吉川: あおばわかば「震災特集号」と第24号では震災による被害や復興支援の様子などを取り上げました。これに続くものとして、教育復興やボランティア活動の特集を盛り込みたいと考えました。作成にあたって広報誌の役割を実感しました。

清水: 読んでいただきたいトピックはありますか?

吉川: 震災から一年経ったいま、多くの方々の活動、地域の動きが見えてきました。特集では、ほんの一部ですが、宮教生の活動に焦点を当てたトピックもあります。「あおばわかば」は、学生さん、保護者の方々、教育関係者、そして地域の方々と、多くの方々に読んでいただけたら幸いです。また、宮教大をご存知ない方にも大学の活動をわかって頂けるものにしていきたいと思います。

清水: ありがとうございます。「あおばわかば」を作成するにあたって多くの方々のご協力があったからこの広報誌ができると実感しました。私も一人でも多くの方に読んでいただける一冊になるよう今後も努力してまいります。広報誌プロジェクトの皆さまをはじめ、多くの方々に感謝したいと思います。

広報戦略室 広報誌プロジェクト 吉川 和夫  
学生広報スタッフ 清水 卓樹



AOBA-WAKABA



国立大学法人  
宮城教育大学

NATIONAL UNIVERSITY CORPORATION,  
MIYAGI UNIVERSITY OF EDUCATION

本誌の内容や本学の広報に関するご意見・ご要望をお寄せください。

TEL:022-214-3453 FAX:022-214-3400/3309 E-mail:koho@adm.miyakyo-u.ac.jp

〒980-0845 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉149 国立大学法人 宮城教育大学 総務課広報・危機管理係



この印刷物は「水溶性印刷」  
により印刷しております。



環境にやさしい植物由来のインク  
[VEGETABLE OIL INK]で  
印刷しております。